

# 風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅳ

——島根県松江市山代町所在・四王寺跡——

〇〇年 3 月

〇〇教育委員会

## 例 言

1. 本書は昭和59年度に島根県教育委員会が、国庫補助金を得て実施した風土記の丘地内遺跡第4次発掘調査の報告である。調査は将来に予想される開発にそなえて遺跡の保護対策をたてるための基礎資料を得る目的で実施した。
2. 本年度は風土記の丘地内遺跡のうち、四王寺跡（島根県遺跡番号4—182）の発掘調査を行なった。発掘地は島根県松江市山代町144—3で、昭和59年6月16日付け島教文第301号で発掘通知書を提出し、昭和59年9月11日付け委保記第2—2290号で受理通知のあったものである。
3. 調査組織は次のとおりである。

調査指導者 山本清（島根県文化財保護審議会副会長）、池田満雄（島根県文化財保護審議会委員）、町田章（同）、渡辺貞幸（島根大学助教授）、恩田清（松江市文化財保護審議会委員）

事務局 美多定秀（文化課課長）、永瀬忠治（文化課課長補佐）、蓮岡法暉（同）、岩崎況一朗（文化係係長）、永塚太郎（埋蔵文化財第一係係長）、吉川広（文化課主事）、落部章二（財務課主事）

調査員 松本岩雄（文化課主事）、田根裕美子（文化課嘱託）

調査補助員 林健亮（別府大学学生）、下釜豊美（大手前女子大学学生）

調査参加者 松浦兎、梅原弘、浪花芳明、福原敏文、梅原美枝、松浦マシヨ、梅原明枝、川見美智子、松浦和江、梅原伊津子、小野公明、石田彰、山崎洋

遺物整理 浜田ヨシエ、島澄子、目次照江、井上健二、松田浄子、青木紀子、三宅小文

調査協力 村上勇、内田律雄、穴道年弘、三宅博士、宮沢明久、柳浦俊一、勝部衛、川上稔、勝部昭、西尾克己、千家和比古、花谷浩、内田文恵、北村久美子、山代東自治会、山代西自治会、松江市教育委員会、県立八雲立つ風土記の丘

なお、上記のほかは現地において次の方々から指導・助言を受けた。

近藤高一、上原真人、伊東太作、甲元真之、田村兎一、森郁夫、榎山林継、東森市良

4. 発掘調査に際しては、長澤やす子、梅原義夫両氏など土地所有者をはじめ地元の方々には終始多大な協力を得た。
5. 挿図中の矢印は国土調査法による第Ⅲ座標系X軸の方向を指す。したがって磁北より7°12′、真北より0°32′東の方向を示している。
6. 本遺跡出土遺物および実測図、写真は島根県教育委員会で保管している。
7. 本書の執筆、編集は上記調査指導の先生方の助言を得ながら松本岩雄が行なった。

# 目 次

1. はじめに .....	1
2. 位置と歴史的環境 .....	2
3. 調査区の設定とこれまでの調査 .....	4
4(1) 調査区の設定 .....	4
(2) 研究略史 .....	6
4. 層位と遺構 .....	11
(1) 層位 .....	11
(2) 遺構 .....	14
5. 遺物 .....	20
(1) 瓦 .....	20
(2) 土器 .....	26
(3) 石鍋 .....	28
(4) 陶磁器 .....	28
(5) 石硯 .....	29
6. まとめ .....	30

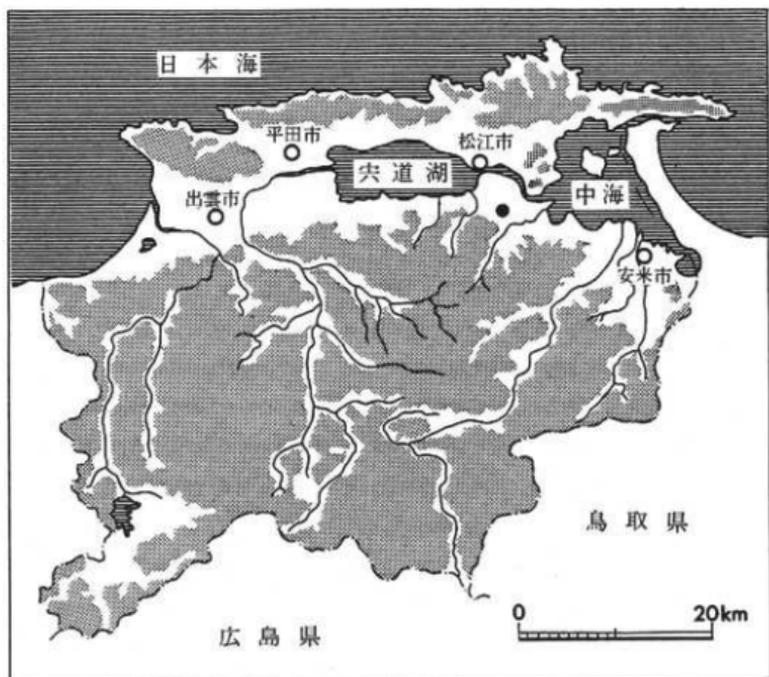


現地説明会

## 1. はじめに

島根県教育委員会では、昭和47年に重要な遺跡の面的な保存と活用をはかるため、松江市の南郊に県立八雲立つ風土記の丘を設置した。そしてその翌年の昭和48年から、風土記の丘整備事業の一環として、毎年地内の主要遺跡について保存の基礎資料を得るための発掘調査を行ってきた。昭和59年度は、発掘調査区を島根県松江市山代町の四王寺跡に選定して調査を実施した。

この地域は字「師(四)王寺」という地名のあることや、古瓦が採集されることから、古代寺院跡の存在したところとして早くから注目されていたところである。すなわち、天和3年(1683)に著わされた『出雲風土記抄』<sup>註1</sup>から昭和56年『修訂出雲国風土記参究』<sup>註2</sup>に至るまで多くの研究者は四王寺跡が『出雲国風土記』所載の山代郷内の新造院の一つにあたるかと推定している。また小字名が



第1図 遺跡の位置 (●印)

「師(四)王寺」であることから『三代実録』貞観9年(867)にみえる「四天王像」を置いた寺であることも指摘されている。<sup>註1</sup>ところが、これらはいずれも『出雲国風土記』に記載された方向・里程のほか小字名、採集された古瓦などをもとに推定されていたもので、これまでのところ具体的な調査等はほとんど実施されていなかった。

そこで、その実態を把握する糸口を求めて、昭和59年度風土記の丘地内遺跡発掘調査としてこの四王寺跡の発掘調査に着手することとした。したがって、このたびの調査の主たる目的は、遺構の遺存状態がどの程度であるかを確認するところであり、その状況のみを今後の調査方法、保護対策の方向性を見いだそうとするものである。また、あわせて寺院跡とすればその伽藍配置はどのようなものであったか、創建期はいつごろで『出雲国風土記』所載の新造院とどのようなかわりをもつか、いつごろまで存続していたか、「四天王像安置の寺」として利用された形跡があるかなどといった点についても何らかの手がかりを得ようとして実施することにした。

註1 岸崎左久次時照『出雲風土記抄』 天和3年

2 加藤義成『修訂出雲国風土記参究』 昭和56年

3 大道弘雄「探雲記(第4回)」『考古界』第8編第5号 明治42年

梅原末治「出雲の国分寺と四王寺の址」『歴史地理』第31巻第5号 大正7年5月などを  
はじめ多くの文献がある。

## 2. 位置と歴史的環境

四王寺跡と称されている遺跡(島根県遺跡番号4-182)では、島根県松江市山代町字師(四)王寺を中心として相当広範囲にわたって古瓦片が採集されている。このうち昭和59年度調査の対象とした地域は字師王寺の東側隣接地にあたる山代町字内堀144-3番地である。ここは松江市の南郊にひろがる意字川下流平野の西北隅にあたり、標高約20mを測る低丘陵緩斜面上に位置している。

山陰本線松江駅からは、東南方向に直線距離で約4.2kmのところである。松江駅から大庭、八雲方面行のバスに乗り、大庭十字路で下車すると国指定史跡「出雲国山代町正倉跡」があり、そこから県道八重垣神社・竹矢線を東に約500m行ったところが四王寺跡である。国土地理院発行の5万分の1地形図「松江」でその場所を示せば、北東コーナーから南へ15.7cm、西へ28cmの地点になる(第1・2図)。

このあたりは、『出雲国風土記』に「神名樋野」と称されている茶臼山(標高171.5m)南麓の

舌状に張り出したところで、地形は台地状を呈している。この舌状の台地は東西約150m、南北約170mあり、北側（標高約23m）から南側（標高約16m）にかけてゆるやかに傾斜しているが、最南端の字丸山の地帯は標高19mあまりと小高くなっており、頂上部には墓地がある。台地のほぼ中央部は県道八重垣神社・竹矢線が東西に通っており、この周辺は相当数の民家が建ち並んでいる。

意宇川下流平野は八東郡八雲村の天狗山に源を発する意宇川によって形成された沖積平野で、西の簸川平野、東の安米平野には及ばないものの、この地域では有数な穀倉地帯のひとつである。この平野の周辺には、縄文時代・弥生時代の遺跡も相当数知られているが、特に古墳時代中期・後期に築造された出雲地域のなかでも著名な古墳群が密集している。平野の奥まった一带（正確には馬



第2図 周辺の主要遺跡分布図

1 : 25000

1. 四王寺跡 2. 米美廃寺 3. 出雲国庁跡 4. 出雲国分寺跡 5. 出雲国分尼寺跡 6. 山代郷正倉跡 7. 大庭鶏塚
8. 山代二子塚 9. 山代方墳 10. 永久宅畠古墳 11. 狐谷横穴群 12. 十王免横穴群 13. 東源寺古墳 14. 黒田館跡
15. 小無田遺跡 16. 閉原古墳 17. 黒田畦土居遺跡 18. 阿田山古墳群 19. 岩屋後古墳 20. 御崎山古墳 21. 西百塚山古墳群
22. 東百塚山古墳群 23. 古天神古墳群 24. 大草岩角古墳 25. 安部谷古墳群 26. 真名井古墳
27. 平所遺跡 28. 上竹矢古墳群 29. 才ノ峠遺跡 30. 中竹矢遺跡 31. 国分寺瓦葺跡 32. 布田遺跡

橋川水系になる)には大庭鶏塚古墳(方墳、一辺約42m)、山代二子塚古墳(前方後方墳、復元全長約92m)、山代方墳(方墳、一辺約45m)、永久宅裏古墳、東淵寺古墳(前方後円墳、復元全長約60m)、十王免横穴群、狐谷横穴群などがある。平野東縁には、昨年円頭大刀に「額田部臣…」の銘文が発見されて全国的に一躍著名になった岡田山1号墳をはじめ、団原古墳、岩屋後古墳、御崎山古墳(前方後方墳、全長約40m)などが分布している。また、平野南側丘陵上には古天神古墳(前方後方墳、全長約27m)、東・西百塚山古墳群、安部谷古墳群があり、さらに北側丘陵上には真名井古墳、中竹矢古墳、上竹矢古墳群などが営まれている。

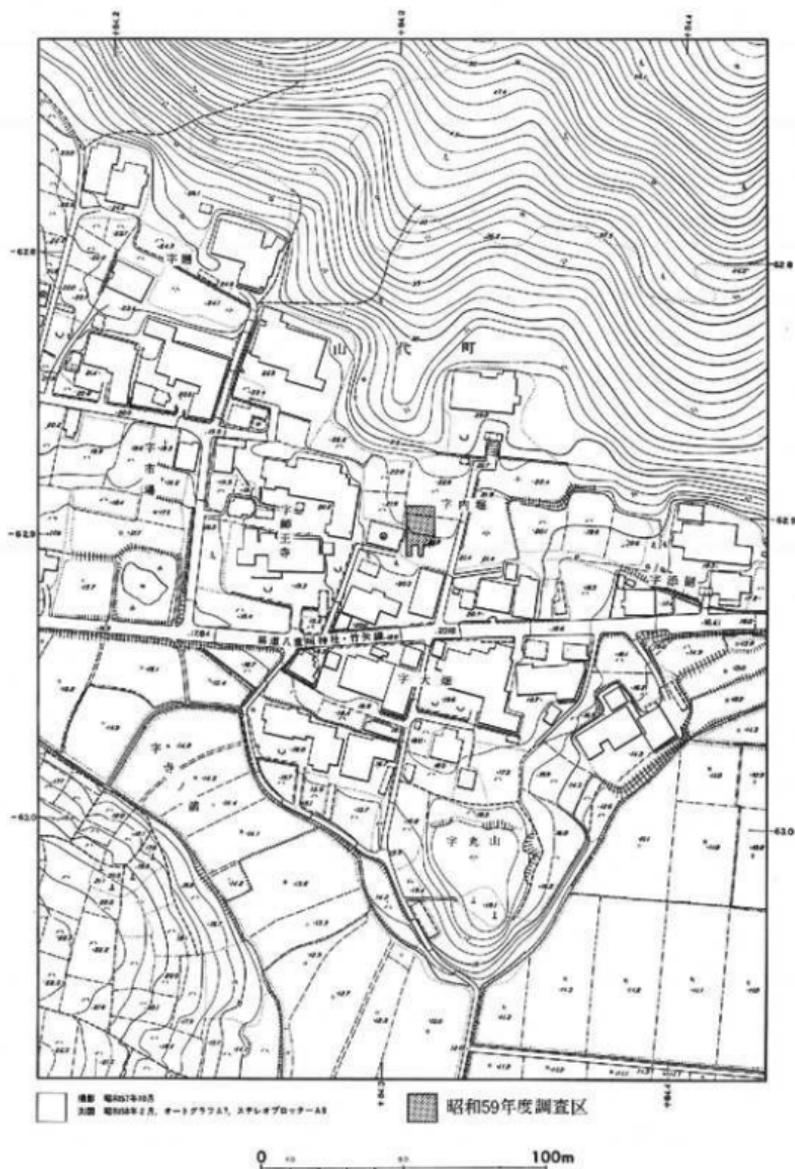
律令時代には、この平野の一角に国庁が設置され、この地域が政治上重要な位置を占めたことが知られる。天平5年(733)に勘造された『出雲国風土記』によれば、このあたりに出雲国庁をはじめ意宇郡家、意宇軍団、駅、山代郷正倉等の公的施設が設置されていたという。また、「新造院」とされている私寺2ヶ所も山代郷内にあったことが記されている。意宇郡家、意宇軍団、駅等については今のところ明確な遺構が検出されていないが、近年の発掘調査により出雲国庁については六所神社周辺、山代郷正倉については大庭十字路付近が有力であるとの結論が得られている。山代郷内に所在する「新造院」2ヶ所については、このたび発掘調査を実施した四王寺跡と、茶臼山北方に位置する来美庵寺をあてる説が最も多い。さらに、平野の北辺には天平13年(741)の園分寺造営の詔により建立された出雲園分寺跡・園分尼寺跡がある。このように、意宇川下流平野は律令時代になると名実ともに出雲の中心地となる。

以上、主要遺跡分布を概略記したように、意宇川下流平野一帯は古代出雲国を解明するに欠くことのできない重要な遺跡密集地であるといえる。

### 3. 調査区の設定とこれまでの調査

#### (1) 調査区の設定

昭和59年度調査区設定にあたっては、遺跡の範囲を確認することも重要と考えられたが、まず遺構の残存状態を把握しておくことが先決と判断されたため、比較的旧地形が残っていると思われる地域をできるかぎり広範囲にわたって調査しようと考えた。そこで、字「師(四)王寺」の東側にあたる字「内堀」の地域を調査区として選定することにした。ここはちょうど山代東集落センターの東側隣接地にあたり、標高23~20.5mのゆるやかな斜面で、東西約35m、南北約40mの範囲が畑として利用されている。また、字「師(五)寺」にあたる梅原肆郎氏宅や松浦広氏宅より地盤が1~3m<sup>※1</sup>高いことが注意される。『島根県史』によれば、ここに礎石が存在していたといわれていること



第3図 四王寺跡周辺地形及び調査区位置図

1 : 2000

や、地盤が一段高いことなどから、この地点に金堂跡があったのではないかと推定されているところでもある。

調査区は、今後継続して周辺部の調査を実施することを前提にして、国土調査法第Ⅲ座標系のX軸、Y軸の方向に合わせることにした。調査範囲は、国土調査法第Ⅲ座標系X=62km880m~62km906m、Y=+84km304m~+84km314mで、約156㎡である(第3図)。

## (2) 研究略史

四王寺跡は、これまで発掘調査が実施されていないものの『出雲国風土記』記載の新造院に比定されていることや、『三代実録』にみえる「四天王像安置の寺」とも関連して、これに関する研究は相当に古くからなされている。したがって、四王寺跡をとり上げた論文・記述等はきわめて多く、そのすべてにわたって網羅することは甚だ困難であるうえ、限られた紙幅ではとうてい紹介することもできない。ここではそのうち主要な文献をとりあげて、これまでの四王寺跡に関する研究の一部を素描しておくことにする。

研究略史を述べる前にまず記しておかねばならないのは『出雲国風土記』の記載である。『出雲国風土記』意宇郡の条には、山代郡内に2ヶ所の新造院のあったことが下記の如く記されている。

新造院一所、在山代郡中、郡家西北四里二百步。建立殿堂也。<sup>註2</sup> 日置君目然之所造也。

出雲神戶日置君  
總麻呂之所也。

新造院一所、在山代郡中、郡家西北二里。建立殿堂。<sup>作備</sup>一飯石郡少領出雲臣弟山之所造也。

この2ヶ所の新造院の位置は、意宇郡家(国庁と同所にあったと考えられている)からの方向と距離によって示されており、これまでの研究はこの新造院と寺院跡との比定問題、国庁(意宇郡家)の所在地推定にかかわる論議につきるといっても過言ではない。

さて、遺跡としての四王寺跡に関する最も古い記述は、今からおよそ300年前の天和3年(1687)に著わされた『出雲国風土記抄(抄)』<sup>註3</sup>(以下「風土記抄」と略す)であろう。「風土記抄」は『出雲国風土記』の最も古い注釈書であり、松江藩士岸崎左久次時照の著である。「風土記抄」では出雲国庁を「出雲郷村十字街」とし、方向・里程については矛盾をきたすものの、日置君目然が建立した新造院を出雲国分寺跡に、出雲臣弟山が建立した新造院を四王寺跡にあてている。すなわち、「風土記抄」には出雲臣弟山建立の新造院記述の次に

「抄日西北二里 今十二町蓋聞有山代村于四王寺 今者無之不 知抑是乎不」と記されている。

明治40年には柴田常恵が「四王寺」は『三代実録』貞観9年(867)にみえる「四天王像安置の寺」であることを指摘しており、その後全てこれに従っている。なお、新造院との関係については特に触れられていない。

明治42年には大道弘雄が「探雲記」を書いているが、四王寺については先の柴田と同様に「四天

王像安置の寺」であるとし、日置君日烈建立の新造院を国分尼寺に、出雲臣弟山建立の新造院を国分寺にあてている。

その後大正7年に梅原末治は「出雲国分寺と四王寺の址」と題してはじめて考古学的に遺跡の現状と採集遺物についての報告を行なっている。それによれば、<sup>註6</sup>国庁を出雲郷村夫(府)敷あたりとし方向はやや西に偏しているが里程の関係から、日置君日烈建立の新造院を四王寺跡に比定し、貞観年間以後は四王寺として使用されたものと推定されている。この場所が四王寺としてはふさわしくない低地に位置していることについては、北側に接してある茶臼山上に別に監視の設備を置いたものと解せばよいとしている。古瓦は軒丸瓦2種、軒平瓦1種が紹介されているが、これらはいずれも平安初期のものと考えられるとし、天平時代の遺物は未だ採集されていないとしている。なお、国分寺については出雲臣弟山建立の新造院を後に改めたものとしている。国庁を字「夫敷」に求める限り、梅原のこの説はきわめて説得力のあるもので、その後多くの研究者がこの考えとほぼ同様な見解を示している。すなわち、大正14年に刊行された「島根県史」、大正15年の「出雲国風土記考證」<sup>註7</sup>「八東郡誌」<sup>註9</sup>等がそれである。

ところが、「出雲国風土記考證」を著わした後藤蔵四郎は、その後昭和12年刊行の『出雲国風土記註解』<sup>註10</sup>において若干の修正を行なっている。つまり、四王寺跡を日置君日烈建立の新造院とする<sup>註10</sup>と郡家からの距離に合いかねるので「山代の後分にて射の場の西北に礎石の残る所(来美庵寺にあたとされる — 筆者註)がそれか。」としている。出雲臣弟山建立の新造院は相変わらず国分寺跡にあてているが、来美庵寺を日置君日烈建立の新造院に比定した初見のものとして評価されよう。

昭和28年には国庁の所在地に関してこれまでの説を根本的に見直そうとする画期的な論文が出された。朝山皓の「出雲国風土記における地理上の諸問題」<sup>註11</sup>がそれである。朝山は出雲郷の字「夫敷」は「道路として大きく見て正しい十字街ができぬ欠点もあり、また意宇川の氾濫を考えると実に危険千万な場所」であることから国庁とするにはふさわしくないとし、まず来美庵寺を日置君日烈建立の新造院、四王寺跡を出雲臣弟山建立の新造院にあて、この両跡から逆に南東二里と四里二百歩のところ、すなわち大草集落の西端を国庁に求めようとしたのである。山代郷内の2ヶ所の新造院と国庁の所在地については、その後この朝山説が最も有力視されることとなり、「出雲国風土記参究」<sup>註12</sup>等もこれに従っている。

朝山論文の発表、「出雲国風土記参究」の刊行以後は、特に出雲国庁所在地をめぐる研究が進められ、恩田清が意宇郡大草村御鏡地帳等に「こくてふ」「さい所」などの地名が存在することをつきとめ、昭和37年に六所神社北西の字「竹ノ後」を中心とする方2丁を国庁に、その周囲方6丁を国府に想定する説を公表するに至った。<sup>註13</sup>これに基づき、さらに恩田清は昭和39年に「山代南新造院と四王寺について」と題して、四王寺跡と「出雲臣弟山建立の新造院」・「四天王像安置の寺」

との関係について詳細に論じた。<sup>註14</sup>

これに対して水野祐は、昭和40年に「出雲国風土記論致」なる大著を著わし、そのなかで国庁を松江市竹矢町三軒屋の東南400mに比定し、この地点を起点にして日置君日烈建立の新造院を四王寺跡に、出雲臣弟山建立の新造院を大草町竹ノ後北方にあてている。水野は単に所在地を推定するのみにとどまらず、新造院の性格についてもかなり詳細に論述している。すなわち、「新造院」とは「新しく造った寺の意で、いまだ寺号の定められていないもの」<sup>註15</sup>などではなく、「出雲国風土記」勸造の年より相当古くから建立されていたものもあり、「風土記」の記載では「寺」と「院」を明確に区別しているとしている。そして新造院の立地などから「恰も新羅の驛院制に於ける院宇の如きもので、恐らくそれに則って、地方豪族の慈善事業として、全く私的に建設された専ら旅人救済のための休憩所乃至無料宿泊所としての施設を附帯した、本堂或は三重塔を中心にした一区内の建造物群の総称である」とされた。

新造院について論じたものとしてはほかに近藤正の論致がある。近藤は遺跡・遺物の詳細な検討に基づき、「出雲国風土記」記載の新造院と寺跡の比定を行ない、その造立者の性格について論究している。山代郷内の2ヶ所の新造院所在地については、朝山皓・加藤義成等と同様に米美庵寺・四王寺跡をあてている。「出雲国風土記」記載の新造院出土古瓦に関しては、大きく教吳寺跡系瓦



第4図 寺院跡・国庁推定地等位置図 1:50000

- A. 四王寺跡 B. 米美庵寺 C. 出雲国分寺跡 D. 出雲国分尼寺跡 E. 山代南庵寺 F. 出雲国庁跡(六所神社付近) G. 出雲国庁推定地(出雲郷字夫敷) H. 出雲国庁推定地(竹矢町三軒屋・丁が坪) I. 出雲国庁推定地(竹矢町三軒屋の東南) J. 山代郷正食跡 K. 茶臼山(神名桶野)

表1 山代郷内の新造院推定地一覧

文 献	寺跡等	四王寺跡	来美庵寺	国分寺跡	国分尼寺跡	そ の 他	出雲国庁
岸崎時胤『出雲国風土記抄』天和3	出雲臣弟山建立の新造院			日置君日烈建立の新造院			出雲郷村 十字街
大道弘雄『探雲記』明治42	四天王像安置の寺			出雲臣弟山建立の新造院 ↓ 国分寺	日置君日烈建立の新造院 ↓ 国分尼寺		
梅原未治「出雲の国分寺と四王寺の址」大正7	日置君日烈建立の新造院 ↓ 四王寺			出雲臣弟山建立の新造院 ↓ 国分寺			出雲郷村 夫(府)敷
野津左馬之助『島根県史』大正14	日置君日烈建立の新造院 ↓ 四王寺			山雲臣弟山建立の新造院 ↓ 国分寺			出雲郷村 上夫敷
後藤蔵四郎『山雲国風土記考證』大正15	日置君日烈建立の新造院 ↓ 四王寺？			出雲臣弟山建立の新造院 ↓ 国分寺			出 雲 郷
後藤蔵四郎『山雲国風土記註解』昭和12			日置君日烈建立の新造院	出雲臣弟山建立の新造院			出 雲 郷
朝山昭「出雲国風土記における地理上の諸問題」昭和28	出雲臣弟山建立の新造院		日置君日烈建立の新造院				大草集落の 西端
加藤義成『出雲国風土記参究』昭和32	出雲臣弟山建立の新造院 ↓ 四王寺		日置君日烈建立の新造院				六所神社西北
忍田清「山代南新造院と四王寺について」昭和39	出雲臣弟山建立の新造院 ↓ 四王寺		日置君日烈建立の新造院				六所神社付近
水野祐『出雲国風土記論攷』昭和40	日置君日烈建立の新造院 ↓ 四王寺					大草町竹ノ後北方を出雲臣弟山建立の新造院とする	竹矢町三軒屋の東南
近藤正「出雲国風土記所載の新造院とその造立者」昭和42	出雲臣弟山建立の新造院		日置君日烈建立の新造院				
山本清・池田満建『新修島根県史』昭和43	出雲臣弟山建立の新造院？ ↓ 四王寺		日置君日烈建立の新造院			山代南庵寺も出雲臣弟山建立の新造院の可能性あり	六所神社ないし大草集落付近

があるとし、教興寺跡瓦——来美廃寺——四王寺跡という系譜があり、これらの文様意匠は新羅との関連があるものとしている。造立者の性格については、出雲臣・神門臣等単に大化前代から続いた古い伝統をもった郡司層だけでなく、この時代に勢力をもつに至った新興の豪族(「日置部根根」「樋印支知麻呂」)によって建立された寺院もあったとし、そうした新興豪族は「山間部に近い僻地(恐らくは製鉄による在地勢力の拡張によったものであろうか)にしか存在し得なかったのではなかろうか。」とされている。

その後新造院について積極的に取りあげた論文はないが、昭和43年から45年にかけて松江市大草町六所神社周辺発掘調査が実施され、奈良時代の企画性のある建物群、硯、墨書土器、木簡などが検出され、このあたりが国庁としてほとんど確定的になった。<sup>註17</sup>したがって、山代郷内の新造院については六所神社周辺からの方向・里程を考えるとおのずと日置君日烈建立の新造院は来美廃寺に、出雲臣弟山建立の新造院は四王寺跡にあてることが順当な考えとなり、現在では定説化しているとい<sup>註18</sup>ってよい。ただし、『新修島根県史』では四王寺跡の東150mほどの茶臼山南麓に奈良時代後期の特色を示す古瓦類が発見されており(山代南廃寺と称されている)、ここを出雲臣弟山建立の新造院と推定する説のあることが紹介されている。

四王寺跡に関するこれまでの研究は大略以上のとおりである。

なお、蛇足ながら『出雲国風土記考證』『出雲国風土記参究』『出雲国風土記論攷』などをはじめとするほとんどの主要文献において「『風土記抄』では日置君日烈建立の新造院を四王寺跡にあてている」としているが、此章冒頭に「風土記抄」を引用した如く誤りであるので注意を要する。「風土記抄」では国庁を出雲郷村と考えておりながら、不思議なことに『出雲国風土記』の記載によれば国庁(意宇郡家)から距離が近いはずの出雲臣弟山建立の新造院を、実際には日置君日烈建立の新造院に比定した国分寺跡より遠く離れた四王寺にあてており、結果として現在定説化している見解と一致していたことになるのである。

註1 野津左馬之助『島根県史』第5巻 島根県史編纂掛 大正14年

2 『出雲国風土記』原文の引用は、加藤義成『改訂出雲国風土記参究』(昭和57年)による。

3 岸崎左久次時照『出雲国風土記抄』天和3年、以下「風土記抄」原文の引用は桑原家本(島根大学図書館蔵)による。

4 柴田常恵「四王寺」『宗教界』第3巻第1号 明治40年

5 大道弘雄「探雲記(第4回)」『考古界』第8篇第5号 明治42年

6 梅原未治「出雲国分寺と四王寺の址」『歴史地理』第31巻第5号 大正7年

7 註1に同じ

- 8 後藤藏四郎『出雲国風土記考證』大正15年
- 9 奥原碧雲『八束郡誌』大正15年
- 10 後藤藏四郎『出雲国風土記註解』島根県教育会 昭和12年
- 11 朝山皓「出雲国風土記における地理上の諸問題」『出雲国風土記の研究』出雲大社 昭和28年
- 12 加藤義成「出雲国風土記参究」昭和32年
- 13 恩田清「地名<こくてふ>を追って」昭和37年4月16日付『島根新聞』
- 14 恩田清「山代南新造院と四王寺について」昭和39年7月13・14・15日付『島根新聞』
- 15 註12文献や、秋本吉郎『風土記』（日本古典文学大系）昭和33年などはこのように解している。
- 16 近藤正「『出雲国風土記』所載の新造院とその造立者」『日本歴史考古学論叢』2 昭和42年
- 17 松江市教育委員会「出雲国庁発掘調査概報」昭和46年
- 18 山本清・池田満雄「寺院跡」『新修島根県史』通史篇1 島根県 昭和43年

#### 4. 層位と遺構

昭和59年度調査は、長澤やす子氏宅の前方（南側）にひろがる標高22mあまりのなだらかな台地状部のうち、山代東集落センター東側の畑地を中心に約156㎡にわたって実施した。その結果、耕作土の下はあまり大きな後世の攪乱を受けておらず、多くの遺構が比較的良好な状態で遺存していることが確認された（第5図）。

検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、柱穴跡と考えられるもの約80、地山加工段、溝状遺構1、土壇1などである（第6図、図版3・4）。

以下、まず発掘調査区域内の層位について述べ、次に検出された遺構の概要について記すことにしよう。

##### (1) 層位

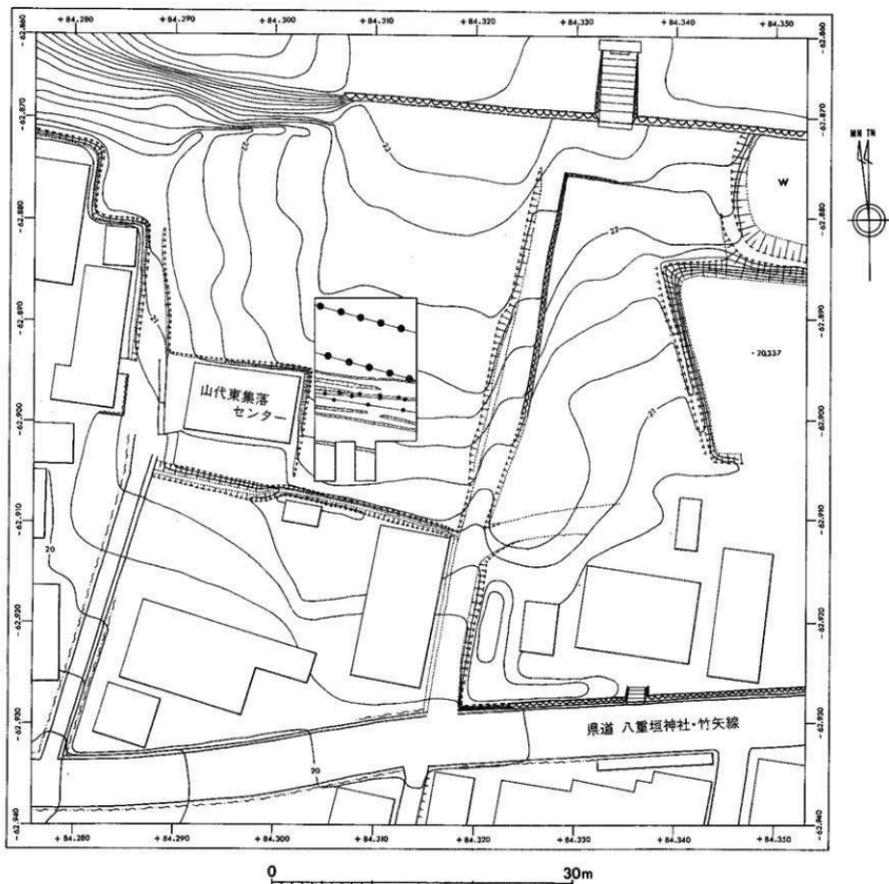
発掘調査区域内の南北方向の土層から記すことにする。図示したのは、 $Y=+84\text{km}314\text{m}$ ライン、 $Y=+84\text{km}310\text{m}$ ライン、 $Y=+84\text{km}304\text{m}$ ラインの土層である。

$Y=+84\text{km}314\text{m}$ ラインの土層（第7図1）は西側から見た図で、北半（ $X=-62\text{km}888\text{m}\sim-62\text{km}$

896 m)は厚さ20~30cmの耕作土の下は地山となっている。地山面の高さは水平に近いが、北から南にかけて20cmあまりの差がある。なお部分的な調査のため不明であるが、最北端部の地山が人工的に加工されたが如き高まりになっていることが注意される。南半(X=-62km896m~-62km902m)は、地山が表土下64cmあまりの深さまで掘削されており、さらにX=-62km900mからX=-62km902mにかけて高さ10cmと5cmあまりの低い段が2つみられる。この低い2つの段のあたりにみられる第5・6・7層は地山ブロックを含まない層で比較的早い段階に堆積した層と思われるが、それらの上部にあたる第2・3・4・8層はいずれも地山ブロックを含む層であり、後世に一度掘りかえられた層のように思われる。この付近の地山面はかなり凹凸が著しい上、南北方に走る畝状の段がみられることなどから、このあたりはたとえばゴボウ、長芋などが植えられており、耕作時にかなり深くまで掘り込まれた可能性がある。なお、遺物は第3層から最も多く出土した。

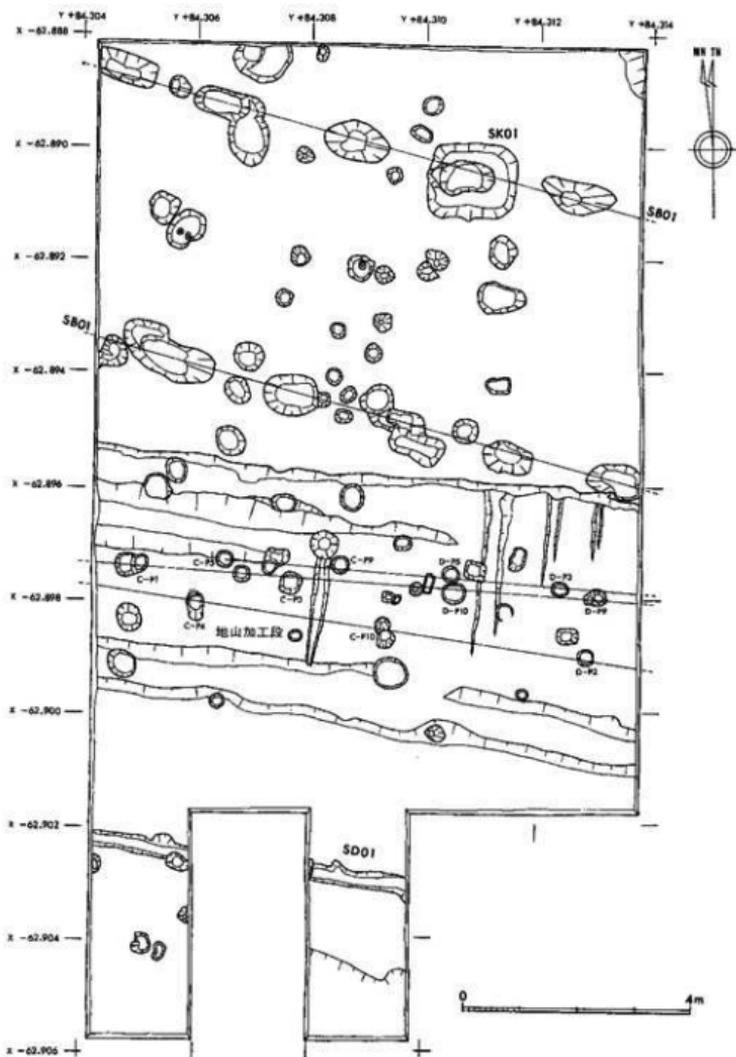
Y=+84km310mラインの土層(第7図2)は、調査区ほぼ中央の土層で、西側から見た図である。先のY=+84km314mラインと同様に北半は20~30cmの耕作土の下がすぐ地山となっており、南半(X=-62km896m~-62km902m)は表土下50~60cmの深さまで掘削されている。また、X=-62km900mあたりに2段の低い地山加工段があり、その中間の地山直上に20~40cm大の比較的大きな自然石がある。この石は断面の状況などからすると大きく動いた形跡は認め難く、もともとこの位置にあった可能性が高い。耕作土の下の第2層は黄褐色地山ブロックを多く含む暗褐色土で、Y=+84km314mラインの第2・3層と同様に後世の攪乱を受けた可能性が高い。この層は遺物を最も多く含むが、遺物はまとまりがなく散在した状況で出土する。第2層以下の第3・4・5・6・7層は地山ブロック等を全く含まず、かなり古い時期に堆積したそのままの状況を示しているものと思われる。

Y=+84km304mラインの土層(第7図3)は調査区西壁のものである。これまで記した他のラインと同様に北半は20~30cmの耕作土の下がすぐ地山となっており、南半は表土下55~70cm掘削されている。このあたりの地山掘削部は遺存状況がきわめて良好である。Y=+84km304mラインの地山加工の状況は、X=-62km895.2mあたりで24cmほど低くなり、幅50cmのテラスを設けたのちにさらに25cmあまり深くになっている。そこで底面幅約40cmの浅い溝状をなしたのち、今度は6cmほど高くなり、幅1.6mほどの平坦面になったのち再び10cmあまり低くなり、さらに幅52cmあまりのテラスをつくったのち16cmほど低くなっている。またX=-62km902mあたりでは幅30cm、深さ8cmあまりの小さな溝状遺構(SD01)があり、地山加工段からこのあたりまでは比較的平坦であるが、X=-62km904m付近から南は地山がゆるく傾斜している。第1層は昭和56年に山代東集落センター建て替えの際に掘削した土を盛ったもので、第2層がそれまでの耕作土である。第3層は若干の地山ブロックを含んでいるが、Y=+84km308mライン、Y=+84km308mラインほど著しい攪乱は受けていない



第5図 発掘調査区周辺地形図

1:400



第6図 検出遺構平面図

1 : 100

と思われる。この第3層中には遺物は散在的で比較的少ない。第4層以下はほとんど後世の擾乱を受けていない層と思われるものである。遺物は地山を台形に削り出した両側の低いところ、すなわち、第4・5層あるいは第7層あたりに集中して多く認められる。第5層は炭化物を含む暗赤褐色土、第15層は赤褐色土で、焼土と思われる。

次に東西方向の土層をみることにする。図示したのは $X=-62\text{km}896.2\text{m}$ ラインと $X=-62\text{km}902\text{m}$ ラインである。

$X=-62\text{km}896.2\text{m}$ ラインの土層(第7図4)は南側から見た図である。地山面の断面は、 $Y=+84\text{km}310\text{m}$ より西は比較的滑らかな線を示し、東側は凹凸が著しく、西半が遺存状態が良好で、東半が悪いことが知られる。地山ブロックの混入している状況などから第2・3・4層は耕作等により擾乱されている可能性がある。第2層は東半の方が地山ブロックを多く含み、西半が少なくなる傾向にあるが、明確な線を引くことができなかった。

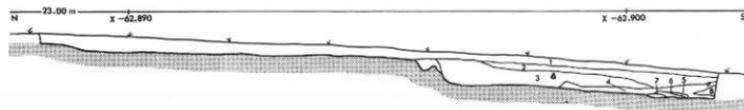
$X=-62\text{km}902\text{m}$ ラインの土層(第7図5)は北側からみた図である。地山面はほぼ水平であるが、土層はかなり細かく分かれている。第2・4・5層などは若干の地山ブロックを含む層で、耕作等によりいくらかの擾乱を受けた形跡がみとめられるが、それ以外の層は比較的プライマリーな層ではないかと思われた。特に7・8・12・15層はほぼ等間隔に薄く堆積しており、意識的に整地された層である可能性もある。なお、地山直上の第15層は赤褐色を呈する薄い層で、焼土と考えられる。

このほかに、調査区域内ではないが、山代東集落センター北側に土層断面が露出していたので、略図を作成して図示しておいた(第7図6)。東西方向の土層断面を南側から観察したもので、やや斜めになってはいるがほぼ $X=-62\text{km}894\text{m}$ ラインあたりになり、 $Y=+84\text{km}290\text{m}$ から $Y=+84\text{km}304\text{m}$ の範囲になる。この土層断面図ではアミ目で表現した部分が地山で、平行線で示した部分が集落センター建設のために削平された面である。ここで特に注意されるのは境界柱から西側へ約5.2mのところでは地山が25cm以上落ち込んでいることである。発掘調査区南半で検出された大規模な地山加工段と一連のものである可能性がある。

## (2) 遺構

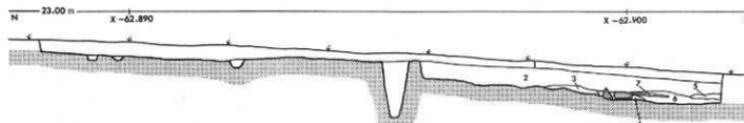
発掘調査区域内で検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟(SB01)、柱穴跡と考えられるもの約80、地山加工段、溝状遺構1(SD01)、土壇1(SK01)などである。

**SB01** 調査区北半の表土下20~30cmのところ検出した。調査範囲が狭かったため建物規模は確認することができなかったが、少なくとも東西4間以上のかかなり大規模な掘立柱建物跡になるものと考えられる。東西棟建物跡と推定され、東西主軸と直交する方位は $TN-16^{\circ}-E$ を測る。柱間寸法は桁行2.10m(7尺)等間になっており、北側柱穴列と南側柱穴列との間隔(梁間)は4.60m(7.6



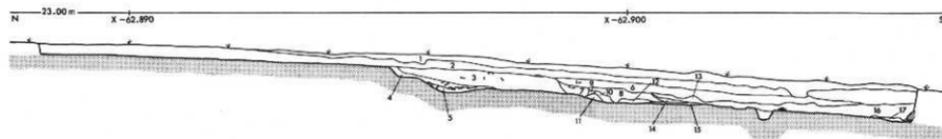
(1) Y 84:314ライン土層

- |                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| 1 耕 作 土              | 2 暗褐色土(黄褐色ブロックを若干含む) |
| 3 暗褐色土(黄褐色ブロックを多く含む) | 4 黒褐色土(黄褐色ブロックを含む)   |
| 5 暗黄褐色土              | 6 暗褐色土               |
| 7 黄褐色土               | 8 黒褐色土(黄褐色ブロックを多く含む) |



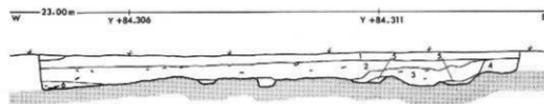
(2) Y 84:310ライン土層

- |         |                      |
|---------|----------------------|
| 1 耕 作 土 | 2 暗褐色土(黄褐色ブロックを多く含む) |
| 3 暗黄褐色土 | 4 黄褐色土               |
| 5 暗褐色土  | 6 黒褐色土               |
| 7 黒 色 土 |                      |



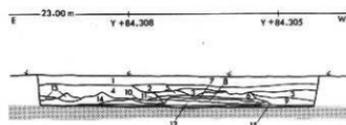
(3) Y 84:304ライン土層

- 1 藍 土
- 2 耕 作 土
- 3 暗茶褐色土(地山ブロックを含む)
- 4 暗褐色土
- 5 暗赤褐色土
- 6 暗茶褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 黒褐色土(地山ブロックを含む)
- 9 暗褐色土
- 10 暗赤褐色土
- 11 紺 色 土
- 12 暗赤褐色土
- 13 黒色土(地山ブロックを含む)
- 14 暗赤褐色土
- 15 赤褐色土
- 16 暗褐色土(炭化物を含む)
- 17 暗赤褐色土



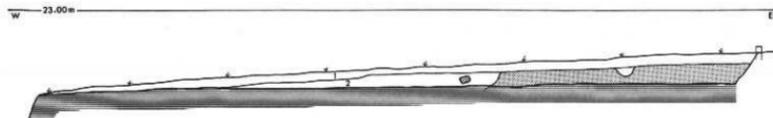
(4) X -62:896.2ライン土層

- |         |                      |
|---------|----------------------|
| 1 耕 作 土 | 2 暗褐色土(黄褐色ブロックを含む)   |
| 3 暗黄褐色土 | 4 黄褐色土(黄褐色ブロックを多く含む) |
| 5 暗褐色土  | 6 暗褐色土               |



(5) X -62:902ライン土層

- |                      |                    |                      |
|----------------------|--------------------|----------------------|
| 1 耕 作 土              | 2 暗褐色土             | 3 黒褐色土(炭化物を含む)       |
| 4 暗褐色土(黄褐色ブロックを多く含む) | 5 黒褐色土(黄褐色ブロックを含む) | 6 黄褐色土               |
| 7 暗赤褐色土              | 8 暗黄褐色土            | 9 暗褐色土(黄褐色ブロックを多く含む) |
| 10 黒 色 土             | 11 黄褐色土            | 12 黒色土(黄褐色ブロックを多く含む) |
| 13 暗褐色土              | 14 黒 色 土           | 15 赤褐色土(脱けたものか)      |



(6) 山代東集落センター北側崖面土層

- 1 耕 作 土
- 2 暗褐色土



尺)あまりある。この間隔からすると梁間は2間であった可能性が高い。検出した柱穴は計10個あり、いずれも長さ100~120cm、幅50~70cmの楕円形乃至隅丸長方形を呈し、深さは70cmあまりある。いずれも東西方向に長い楕円形プランを示すので柱抜き取りの際にこのような形状になったのではないかと考えたが、柱穴内の土層の観察等では確認することができなかった。当初からこうしたプランであった可能性もある。なかには柱痕跡と思われる土層の観察できるものもあり、径約20cm大の柱を用いていたことが推測された(第8図)。

P<sub>1</sub> 調査区北西隅で検出したもので、柱掘り形は東西方向に長い隅丸長方形を示す。上端長径100cm・短径50cm、下端長径60cm・短径20cm、深さ74cmあまりを測る。内部には暗褐色土が認められ、5~10cm大の礫が入っていた。

P<sub>2</sub> P<sub>1</sub>の東側に位置するもので、柱掘り形は東西方向に長い楕円形を示す。上端長径100cm・短径50cm、下端長径70cm・短径40cm、深さ60cmを測る。柱掘り形のはば中央部に幅20cmあまりの炭化物を含む黒褐色土が柱状に認められ、これが柱痕跡と考えられた。その周囲には黄褐色ブロックを含む暗褐色土等がみられた。なお、掘り形のはば中央底面には径18cmあまりの石が置かれていた。礎板状のものとして利用された可能性もある。

P<sub>3</sub> P<sub>2</sub>の東側に位置するもので、掘り形は東西方向に長い楕円形を示す。上端長径116cm・短径70cm、下端径35cm、深さ65cmを測る。柱掘り形のはば中央に柱痕跡と思われる径18cmあまりの炭化物を含む黒褐色土層が柱状に認められた。その周囲には掘り形下半に黄褐色地山ブロックを多く含む褐色土が詰められていた。また、この層の中には軒平瓦や8×18cm大の小石等も詰め込まれていた。掘り形上半には、炭化物と黄褐色地山ブロックを若干含む暗褐色土が詰められていた。

P<sub>4</sub> P<sub>3</sub>の東側に位置するもので、SK01と重複している。プランは東西方向に長い楕円形を呈す。上端長径98cm・短径55cm、下端長径60cm・短径44cm、深さ76cmを測る。内部には暗褐色土が認められた。

P<sub>5</sub> P<sub>4</sub>の東側に位置するもので、東西方向に長い楕円形を示す。上端長径122cm・短径54cm、下端長径38cm・短径24cm、深さ83cmを測る。柱掘り形のはば中央には、柱痕跡と思われる幅20cmあまりの炭化物を含む黒褐色土層が柱状に認められた。その周囲は暗黄褐色土が詰められていた。

P<sub>6</sub> 南側柱穴列の西端に位置するもので、柱掘り形は東西方向に長い楕円形を呈す。上端長径140cm・短径60cm、下端長径92cm、短径45cm、深さ54cmを測る。掘り形内には赤褐色・黄褐色のブロックを含む暗褐色土がみられたが、柱痕跡は確認することができなかった。また5~15cm大の小石が8個以上入っていた。

P<sub>7</sub> P<sub>6</sub>東側に位置するもので、柱掘り形は東西方向に長い楕円形を示す。掘り形東側で径25cmあまりの小ピットと重複していたが、新旧関係を把握することができなかった。上端長径96cm・短

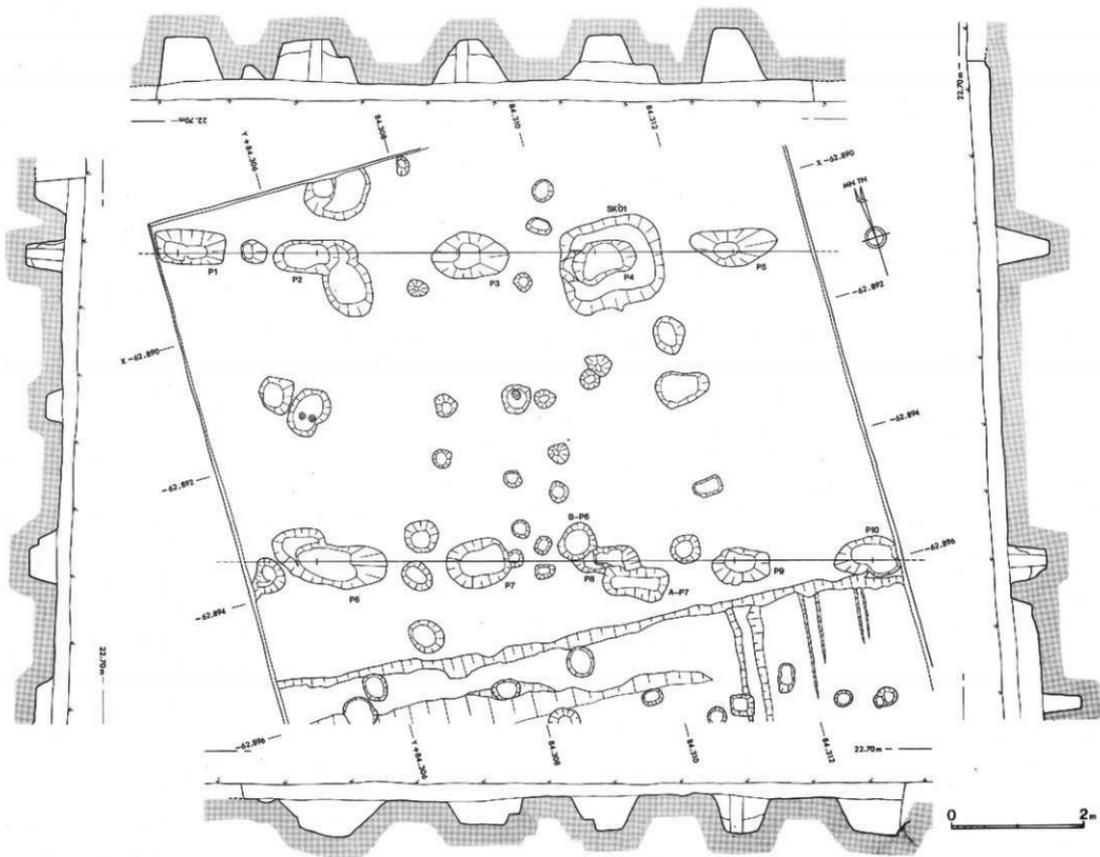
径70cm、下端長径68cm・短径38cm、深さ35cmを測る。この掘り形は他のものに比して深さが浅い。掘り形内には暗褐色土が認められた。

P<sub>8</sub> P<sub>7</sub>の東側に位置するもので、柱掘り形北西隅でA—P<sub>7</sub>と、南東隅でB—P<sub>8</sub>と重複している。土層の観察から、A—P<sub>7</sub>とB—P<sub>8</sub>よりSB01—P<sub>8</sub>の方が新しいものと判断された。柱掘り形は東西方向に長い隅丸長方形を呈し、上端長径100cm・短径38cm、下端長径40cm・短径25cm、深さ52cmを測る。

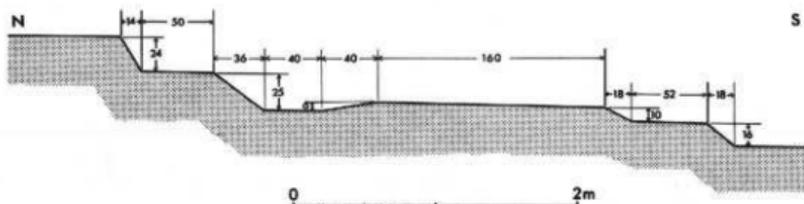
P<sub>9</sub> P<sub>8</sub>の東側に位置するもので、柱掘り形は東西方向に長い楕円形を呈する。上端長径88cm・短径50cm、下端長径46cm・短径26cm、深さ58cmを測る。柱掘り形内のほぼ中央には柱痕跡と思われる褐色土がみられ、上半に黄色ブロックを含む暗褐色土が観察された。

P<sub>10</sub> P<sub>9</sub>の東側に位置するもので、柱掘り形は東西方向に長い楕円形を呈する。掘り形南側が地山加工段と一部接していたが、新旧関係について把握することができなかった。掘り形東端は調査区域外であったため全体規模は確認できなかったが、復元的に計測すると上端長径100cm・短径60cm、下端長径70cm・短径40cm、深さ65cmあまりになる。掘り形内には暗褐色土が認められた。

**地山加工段** 調査区南半で検出した大規模な地山切削加工について特に適切な用語がないので、ここではとりあえずすべてを総称して「地山加工段」として説明していくことにする(第6図)。この地山加工段を北側から順次みていくと、約60度の急角度で24cmほど掘り下げ、幅50cmのテラスを設けたのちにややゆるやかな角度で25cmあまり掘削されている。そこで底面幅約40cmの浅い溝状をなしたのち、今度は約10度のゆるやかな角度で6cmほど高くなり、幅160cmの平坦面になったのち再びゆるやかな角度で10cmほど低くなり、さらに幅52cmあまりのテラスをつかったのち40度あまりのやや急角度で16cmあまり低くなっている(第9図)。この地山加工段は東西方向に長く伸びており、今年度の調査ではその規模を確認するまでには至らなかった。ただし、山代東集落センター北側の崖面観察によれば(第7図6)、境界杭より西側約5.2mのところろに落ち込みらしきものが認められることから、この地山加工段はそのあたりで北方へ直角に折れている可能性もある。地山加工段の西半は遺存状態が良好であるが、Y=+84km310mラインより東側は遺存状態が悪く地山面に凹凸が著しい。また加工段最北の切削は、西半は比較的整っており他の加工と同一方向を示しているが、東半になるにしたがってしだいに不整形なものとなり、方向も北方へカーブしている。さらに一段目のテラスも切削されてしまい、南北方向に畑の畝状の痕跡が残されている。したがってこのあたりは後世の耕作のために地山まで手が加えられたところと考えられる。こうした後世の改変を受けたと思われる地山加工線を無視して考えると、もともとの地山加工はかなり整然としていたものと思われ、その示す方向はE-10°-Sになる。したがってこれと直交する方向はTN-10°-Eということになる。このほか台形状に削り出された幅1.6mあまりの平坦面上で、Y=+84km308mライン



第8图 SB01实测图 1:60



第9図 地山加工段模式図 1:40

付近に南北方向に走る溝が設けられていた。その規模は上端幅26cm、下端幅12cm、深さ12.5cm、長さ190cmを測り、北端はC-P<sub>12</sub>と接している。

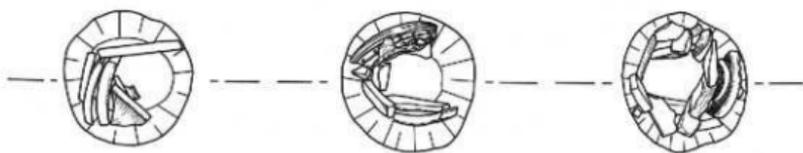
この地山加工段上では約37個の柱穴らしき落ち込みを検出した。3～4個の柱穴がほぼ等間隔で並んでいるものはあるが、今年度の調査範囲のみでは建物跡や地山加工段と直接関連すると思われるものは確認できなかった。

地山加工段上における遺物の出土状況は、北側の浅い溝状部分と、南側のテラス上に集中して列状をなしていた(図版5)。遺物は瓦が最も多く、ほかに須恵器片、土師器片が若干含まれていた。また、これらの遺物とともに自然石も多く含まれており、特に南側テラス上にあった20×30cm大の比較的大きな石6個は南側に面をそろえて並べているのではないかも考えられたが、確認を得るまでには至らなかった。なお、Y=+84km310mより東側は遺物のまとまりがみられず散在的に出土し、やはり後世の攪乱を受けていたことをうかがわせる状況を示していた。

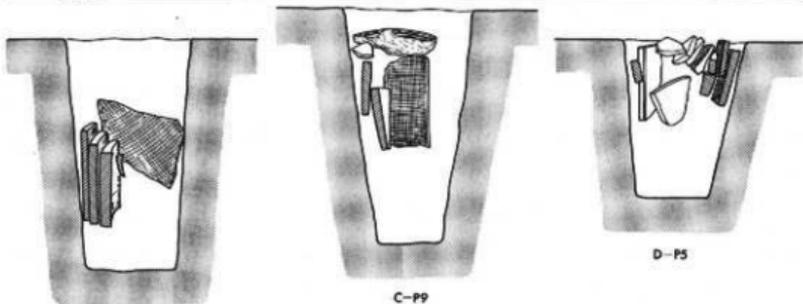
**SD01** 地山加工段の最南端から約2.5m離れて検出された溝状遺構である(第6図)。上端幅30cm、下端幅15cm、深さ8cmあまりを測る。小規模なものではあるが、地山加工段と全く同一方向を示していることが注意される。なお、地山加工段とこのSD01の間はほぼ水平であるがここには1個の柱穴跡らしき落ち込みも認められず、遺物も非常に少なかった。またSD01から南方約1.2mまでは地山はほぼ水平になっており遺物も少なかったが、そこから南側はゆるやかに傾斜しており、瓦小片・5～10cm大の小石等が多数出土した。

**柱穴列** SB01としたもの以外の柱穴は約80個あるが、調査範囲が狭かったためどのような構造のものであったかを把握することができなかった。ここでは、3～4個の柱穴がほぼ等間隔で並んでいるものについて若干紹介しておくことにする。

まず目につく柱穴列はC-P<sub>5</sub>、C-P<sub>9</sub>、D-P<sub>3</sub>、D-P<sub>7</sub>である(第6図)。これらはいずれも柱根固めとして掘り形内に多くの瓦が詰め込まれており、一見して同時期に掘り込まれた可能性の高いことを示している(第10図)。ほぼ198cm(6.6尺)等間で東西方向に並んでおり、これと直交する方位はTN-5°-Eを示す。198cm等間であるとなればC-P<sub>5</sub>の西側にさらにもう一つ柱穴が存在する



21.573m



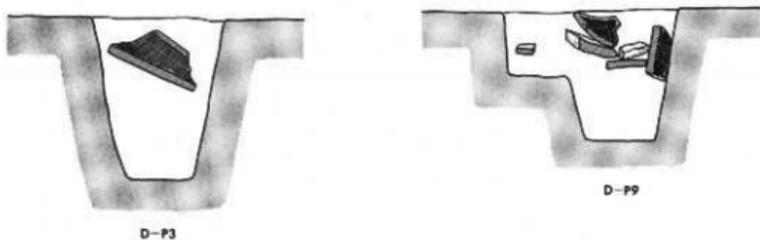
C-P5

C-P9

D-P5



21.575m



D-P3

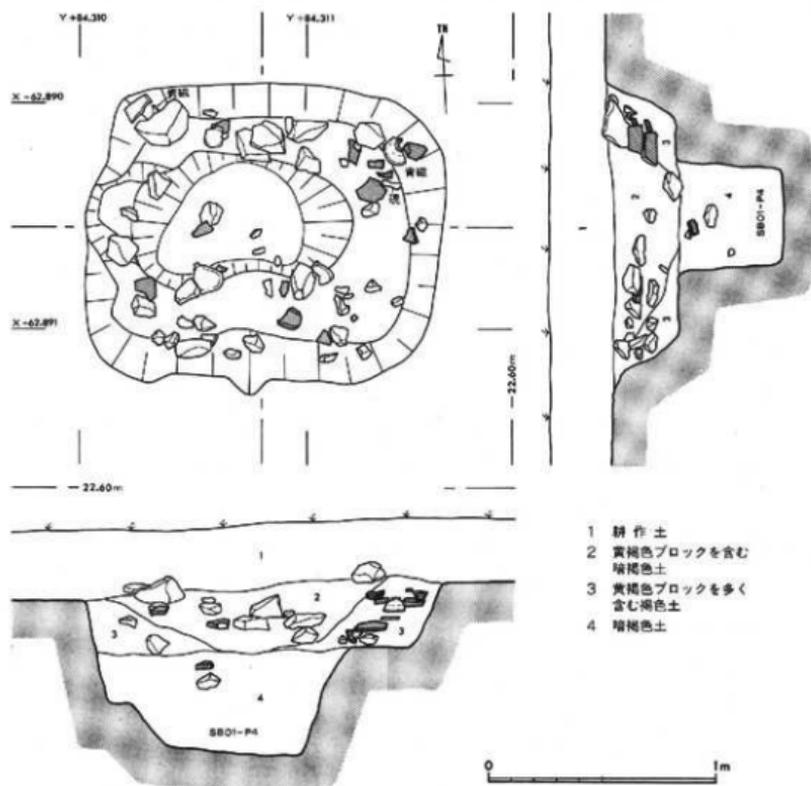
D-P9

0 50cm

第10圖 柱穴内遺物出土狀況実測圖 1:12.5

可能性があると考えられ、精査したが検出することができなかった。柱穴は径28cmあまりの円形を呈し、深さは35～50cmを測る。

次にC-P<sub>1</sub>、C-P<sub>3</sub>、D-P<sub>10</sub>、D-P<sub>9</sub>も列をなしているものと思われる(第6図)。ほぼ270cm(9尺)等間で東西方向に並んでおり、これと直交する方位はTN-4°30'-Eを示す。先に述べた柱穴列にきわめて近い方向を示している。これらの柱穴はいずれも隅丸方形に近い平面形を呈しており、さし渡し36cm、深さ30cmあまりを測る。D-P<sub>10</sub>は上部が破壊されていたため不明であるが、C-P<sub>1</sub>とC-P<sub>3</sub>内はきわめて類似した黄褐色地山ブロックを含む黒褐色土が認められ、柱抜き取り後に同時に埋められたのではないかとさえ思われた。なお、D-P<sub>9</sub>はC-P<sub>3</sub>、C-P<sub>3</sub>、D-P<sub>9</sub>などとは異なり、柱抜き取り後に瓦片を投げ入れたのではないかとと思われる状況を示していた(第10図)。



第11図 SK01実測図 1:25

このほかC-P<sub>4</sub>、C-P<sub>10</sub>、D-P<sub>2</sub>も列をなしているものと考えられる(第6図)。ほぼ348cm(11.6尺)等間になり、柱間間隔が非常に広い。東西方向に並んでおり、これと直交する方位はTN-10°-Eを示す。この方向は地山加工段の方向と同じで、かつ台形削り出し部の平坦面はほぼ中央に位置していることが注意される。方向や位置などからすれば地山加工段に関係する遺構である可能性も考えられる。これらの柱掘り形は概ね円形を呈し、径28cmあまりと小規模ではあるが、深さは40~60cmありかなり深い。また、C-P<sub>4</sub>とC-P<sub>10</sub>は同じように南側に傾斜するように掘り込まれていることが注意される。

SK01 調査区域内の北東側のSB01-P<sub>4</sub>と重複して検出された土壌である。東西方向にわずかに長い隅丸長方形プランを呈する。上端東西方向の長さ156cm、南北方向の長さ130cm、下端東西方向の長さ106cm、南北方向の長さ94cm、深さ32cmあまりを測る。内部には黄褐色ブロックを含む暗褐色土~褐色土がみられ、青磁碗、硯片、瓦片、須恵器片、小石等が出土した(第11図、図版8)。

## 5. 遺 物

本年度の調査で出土した遺物には、瓦、須恵器、土師器、石鍋、陶磁器、石硯などがある。以下出土遺物の概要を種類別に記すことにする。

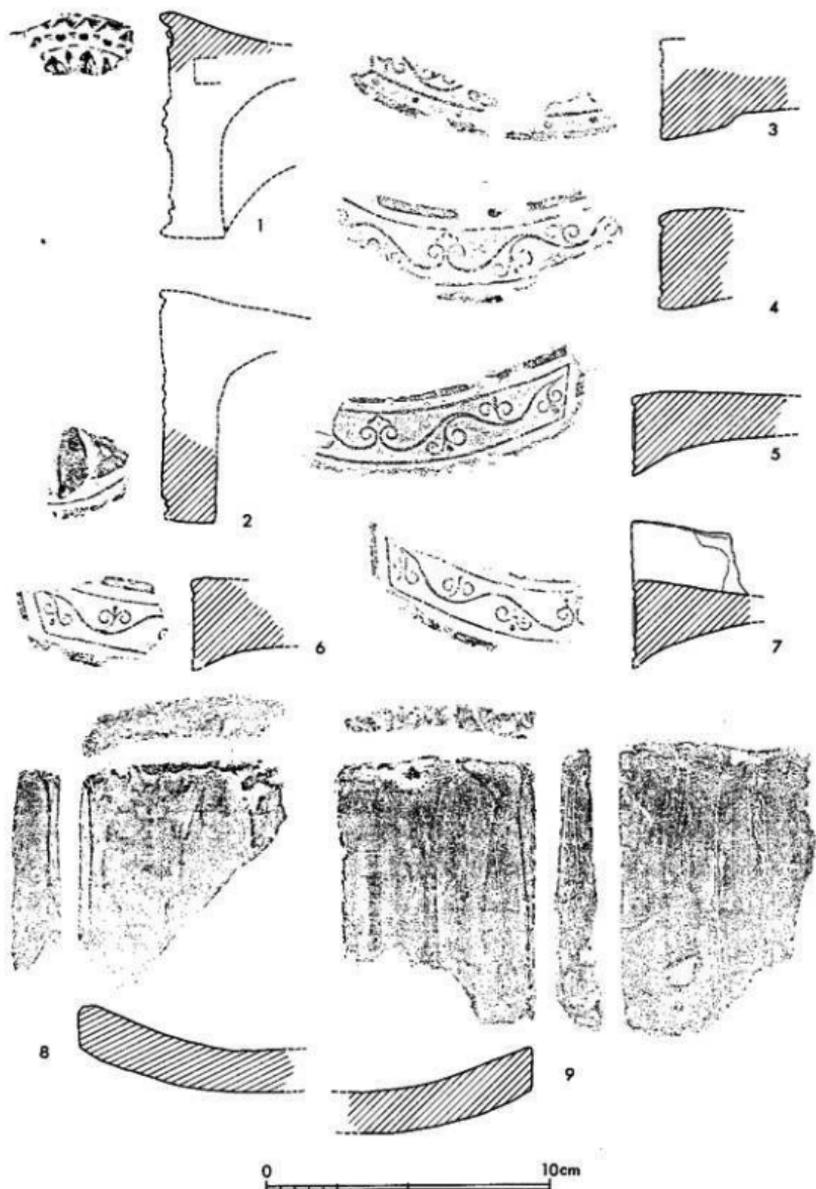
### (1) 瓦

瓦は大半が調査区南半の地山加工段の部分から出土したもので、一部柱穴内に根固めのために意識的に詰めたものもみられた。出土瓦はコンテナ約30箱分あり、このうちほとんどが平瓦、丸瓦で占められ、熨斗瓦、軒丸瓦、軒平瓦が若干含まれているにすぎない。本来ならば平瓦、丸瓦の整理検討を行なうべきであるが、時間的にも紙幅にも制限があるので、ここでは軒丸瓦と軒平瓦を中心に、これまで四王寺跡付近で採集されていたものも含めて取り上げることにしたい。

**軒丸瓦** 本年度調査によって出土した軒丸瓦は2点あり、種類の異なるものである。このほかこれまで採集されていたものが2種あるので、この遺跡では軒丸瓦は4種類あることになる。

四王寺I類軒丸瓦(第12図1、第13図1~4、図版9の12-1、図版10の13-1)

単弁12葉蓮華文軒丸瓦で、瓦当面の径15.7cmある。径3.8cmの中房に1・1・6の蓮子を入れ、細い無子葉弁単弁12葉を配し、その間に間弁をおく。弁央は高くなって稜線がみられ、弁端がわずかに反転する。内区と外区は細い圏線で画し、外区内縁には推定24個の珠文をおいている。外縁は面違い鋸歯文をめぐらす三角縁である。焼成はやや軟かで、胎土は細かく、灰褐色~暗黄褐色を呈す。本年度調査では1点出土しているが、これまでに数点採集されていた種類である。



第12圖 昭和59年度調査出土瓦実測図

四王寺Ⅱ類軒丸瓦（第12図2、第13図5~7、図版9の12-2、図版10の13-6・7）

単弁4葉蓮華文軒丸瓦で、瓦当面の径約16cmある。径4cmの中房に1+4の蓮子を配する。幅広く弁尖がわずかに高くなって稜がとおり、先端が尖る大形の蓮弁を十字形に配し、その間を同様な形の間弁でうめる。外縁は直立縁で素文である。焼成は良好で堅く焼きしまり、須恵質のものが多い。胎土中に小砂粒を含み暗青灰色を呈するものが多い。本年度調査では1点出土したのみであるが、これまで最も多く採集されていたものである。

四王寺Ⅲ類軒丸瓦（第13図8）

単弁14葉蓮華文軒丸瓦で、瓦当面の径は14.5cmあまりある。径4.5cmの中房に1+6の蓮子をおき、粗雑な無子葉弁単弁14葉を入れ、弁間には各1個の珠文を配している。外縁は直立縁で素文である。全体に粗いつくりの瓦であるが焼成は良好で堅い焼き上がりである。本年度調査では出土していないが、これまでに<sup>註2</sup>数点採集されている。

四王寺Ⅳ類軒丸瓦（第13図9、図版10の13-9）

単弁8葉蓮華文軒丸瓦で、瓦当面の径は13.5cmあまりある。圏縁で画された径3.4cmの中房内に1+4の蓮子を配する。蓮弁は突線て表現しており、長さは短く、子葉を二重に区画している。外区内縁は幅1.8cmの唐草文帯をおき、外縁は平坦面の広い直立縁で素文である。焼成はやや悪く胎土中に砂粒を含み、暗黄褐色を呈する。本年度調査では出土していないが、これまでに1点採集されている。来美廃寺に同形品があるが、来美出土瓦は径が8mmばかり小さくなっている。<sup>註3</sup>

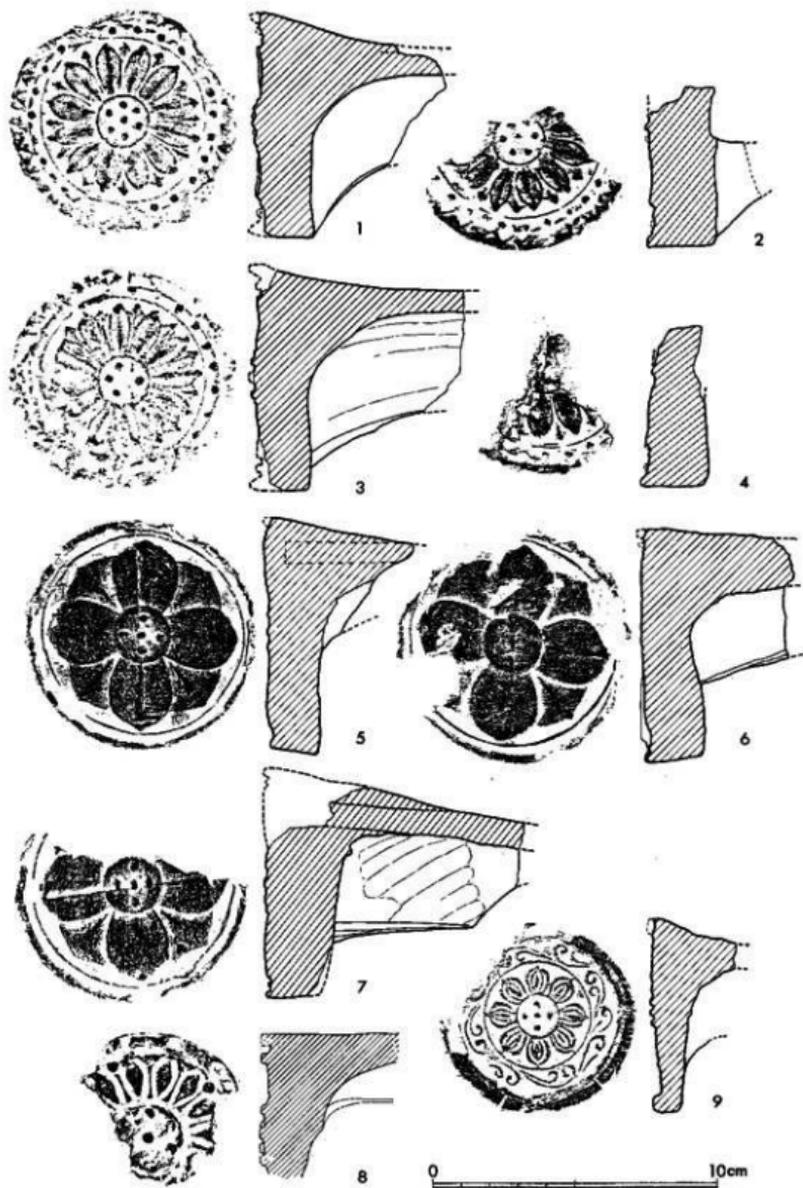
軒平瓦 本年度調査によって出土した軒平瓦は7点あるが、このうち瓦当面の残存しているものは5点あり、2種類のものがある。このほかに、これまでに採集されている資料をみると3種類のものがあり、都合5種類の軒平瓦があることになる。

四王寺Ⅰ類軒平瓦（第12図3、第14図1・2、図版9の12-3、図版10の14-1）。

均整唐草文軒平瓦で、瓦当主文縁は左右両脇から唐草文を3回反転させ、その上に山形の中央飾りがつくものである。上外区、下外区、脇区が幅2mmの界線で画されている。上・下外区に推定9個、脇区に推定2個ずつの珠文を配している。内区の幅2.8cm、外区の幅1cmあまりある。外縁は直立縁で、幅6mmある。顎の形態は段顎で、1枚造りと考えられる。胎土中に小砂粒を含み、焼成は良好。色調は茶灰色を呈す。内区、外区ともに教吳寺跡（野方廃寺）出土軒平瓦・来美廃寺出土軒平瓦に酷似したものがみられる（第19図3・4）。

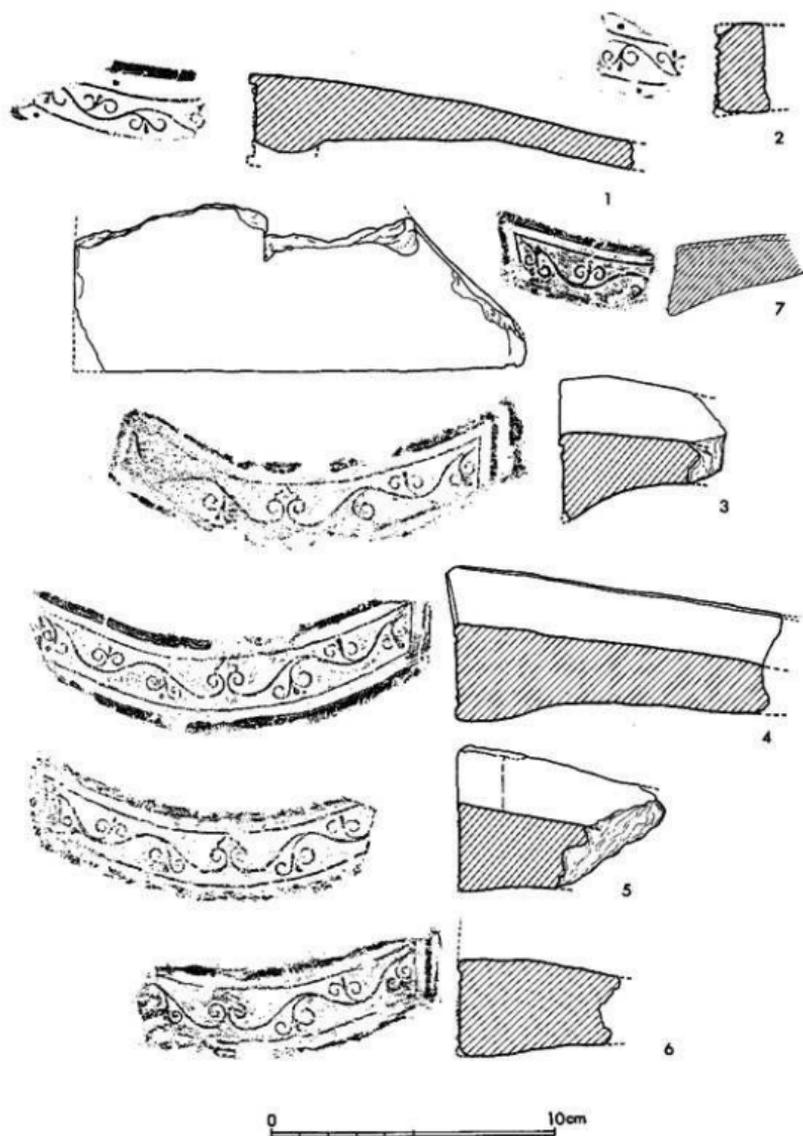
四王寺Ⅱ類軒平瓦（第12図4~7、第14図3~6、図版9の12-4~7、図版10の14-4・5）

均整唐草文軒平瓦で、上弦幅28.5cm、弧深4.3cm、厚さ6.7cmあまりのものである。瓦当主文縁はⅠ類と同様のもので、左右両脇区から唐草文を反転させ、その上に山形の中央飾りがつくものである。内区幅は約4cmで、内区と外区は幅2mmあまりの界線で画されているが、脇区の境界は区



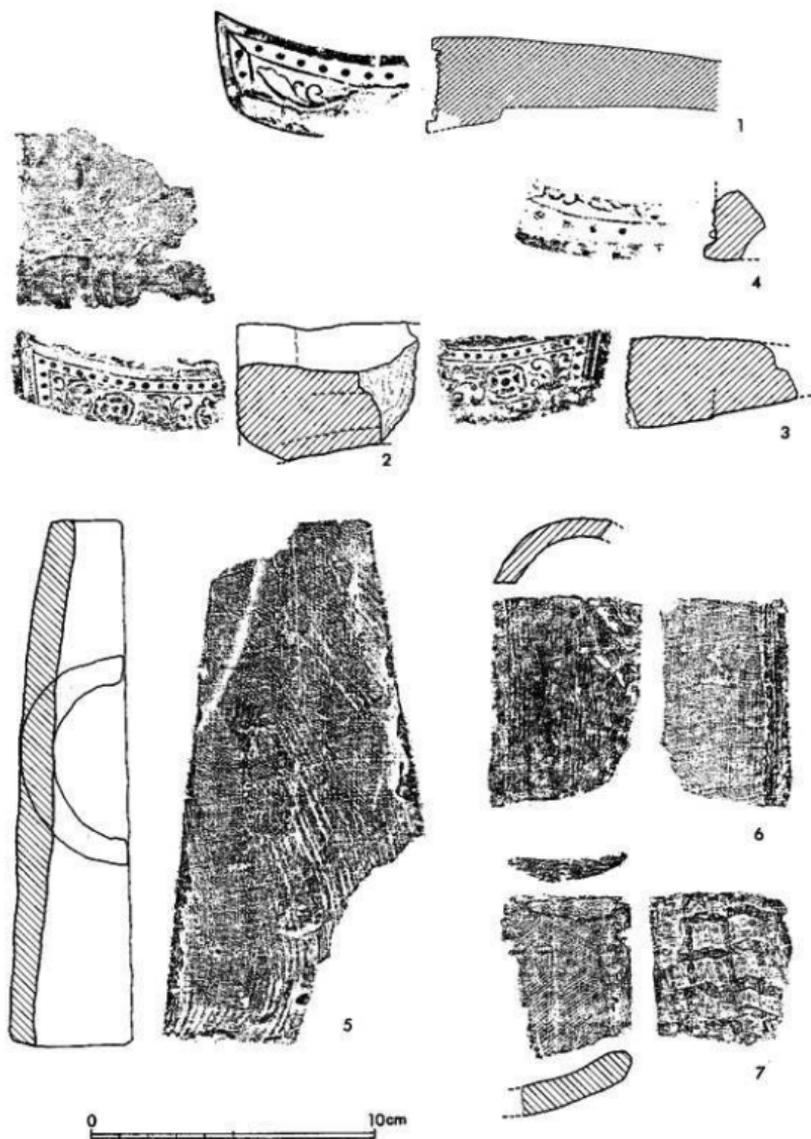
第13图 四王寺跡採集軒瓦実測図 1:4

(I類1~4、II類5~7、III類8、IV類9)



第14图 四王寺跡採集軒平瓦実測図 1:4

(I類1・2、II類3~7)



第15图 四王寺跡採集軒平瓦・丸瓦・平瓦実測図 1:4

(Ⅲ類1、Ⅳ類2・3)

分していない。外区は素文で、上外区・下外区ともに幅は5～6mmある。外縁は直立縁で、幅0.8～1cmあまりある。頸は曲線頸のものが主体をなし、直線頸のものもみられる。1枚造りと考えられる。胎土中に小砂粒を含み、焼成は良好。青灰色～乳灰色を呈す。この種のは本年度出土品に4点あり、これまでに採集されたものを含めると最も多い。なお、このⅡ類と同文であるが、全体にやや小形にしたものもある(第14図7)。

#### 四王寺Ⅲ類軒平瓦(第15図1)

破片しかないので不明であるが、内区主文に草花文風の唐草を配したもので、おそらく中心から左右に派生する形式の均整唐草文であろう。界線の四隅が外縁までのび、外区に珠文をおいている。外縁は直立縁で、頸は段頸である。古く採集されたもので実見することができなかった。<sup>24</sup>

#### 四王寺Ⅳ類軒平瓦

実見し得なかったが、伯耆国分寺跡出土瓦に相似た瓦で、中心裝飾から左右にのびる通常の唐草文で外区に珠文をめぐらしたものがあつた。<sup>25</sup>

#### 四王寺Ⅴ類軒平瓦(第15図2・3、図版10の15-2)

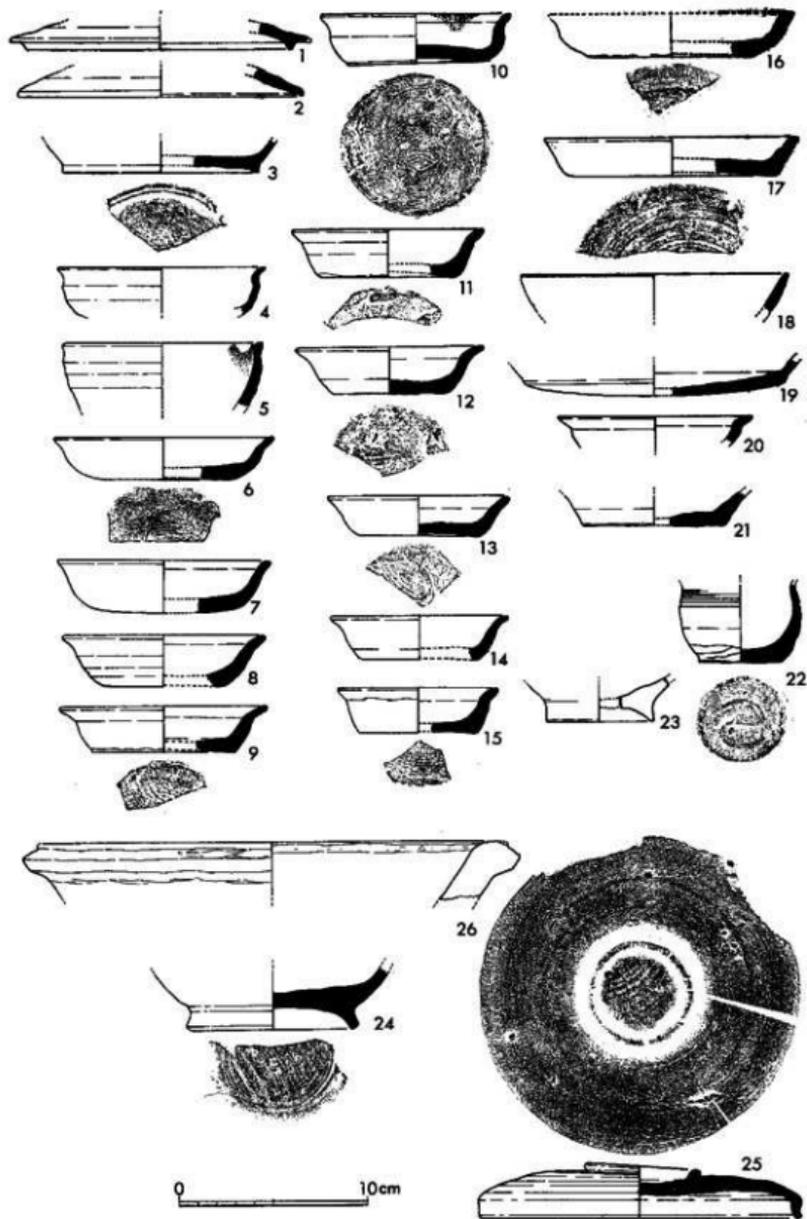
内区主文様は、4弁の花文をほぼ等間隔に配してその間隙に均整唐草文を入れている。外区には珠文を密に入れ、外縁は直立縁である。頸はかすかに段頸の痕跡をとどめているものと曲線頸がある。胎土中に砂粒を含み、焼成は良好で須恵質の焼き上がりである。青灰色を呈する。この種のは出雲国分寺跡出土瓦と同種のもので、これまで四王寺跡では確認されていなかったものである。今回の調査でも出土していないが、この近辺から採集したとのことで地元の梅原肆郎氏と松浦末喜氏が保管されているので、一応Ⅴ類として取り上げておくことにした。

なお、このほかに採集品で外区に珠文を配し、外縁がかなり突出するものがある(第15図4)。主文様はⅠ・Ⅱ類とは異なるようであるが、どのような文様になるか不明なので、このたびは1つの型式として取り上げることは差し控えた。

## (2) 土器

土器は大半が調査区南半の地山加工段上から多量の瓦片とともに出土した。量はきわめて少なく図示したもののほかに器形不明の小片が数十片あるにすぎない。土器には須恵器と土師器があり、土師器は量的に少ない。

須恵器 器種のわかるものは蓋、坏、小形壺などである。蓋は内面にかえりのつくもの(第16図1)と、口縁部端がわずかに屈曲するもの(第16図2)とがある。坏には高台のつくもの(坏Ⅰ)とつかないもの(坏Ⅱ)がある。坏Ⅰ(第16図3)は低い台が付き、底部に糸切痕がみられる。坏Ⅱとしたものは量的に最も多く出土しており、器高が3cm以上のやや深いものと、2.5cm前後の皿状のものがある。器高3cm以上のやや深い形態のもの(坏Ⅱa)はいずれも底部を欠いてい



第16圖 四王寺跡出土須惠器・土師器・石鑄実測図 1:3

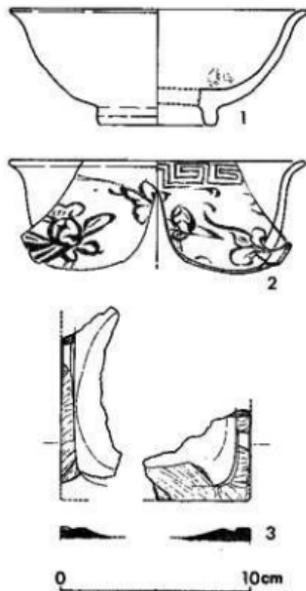
るが、口縁部のくびれが比較的明瞭なものである。皿状に器高が低いもの(Ⅱb)は口径8.5～11.5cmの小形のもので、いずれも底部は糸切りによって切離し、その痕跡を調整していないものである。この種のもは形態からみると口縁部がゆるく外反し、底部と体部の界が丸くなるもの(第16図6～8、10)と、口縁部が屈折し、体部と底部の界が角ばったもの(第16図9・11～15)がある。なお、この種の坯の口縁部内面には黒色有機質の物質が付着している例があり、灯明皿として使用された可能性も考慮される。<sup>註6</sup>小形壺は胴部最大径6.4cmあまりのもので、底部はへら切りによって切離し、その痕跡を調整していないものである。胎土中に小砂粒を含み、表面はザラザラした感じである。淡緑色の釉が薄くかかっている。

このほかに、本年度調査によって出土したものではないが、採集品に須恵器蓋(第16図25)と坏(第16図24)がある。蓋は口径16.8cm、高さ2.8cmの輪状つまみを付したものである。蓋上面には糸切痕がかすかに残り、断面にやや丸味のある低い輪状つまみをつけている。坏は底部を静止糸切りによって切り離したのち「ハ」の字状に開く高合をつけたものである。

土師器 高台付坏のほか図示し得なかったが甕胴部片も出土している。高台付坏は風化が著しく底部調整等については不明である(第16図23)。

### (3) 石 鍋 (第16図26、図版13の16-26)

調査区南半の地山加工段の東寄り第2層中から出土したものである。瓦片、土師器片等と混在した状態で出土しているため、確実な伴出遺物については不明である。滑石製で胴部の復元径26cmあまりあり、外面には銚部削り出しの際の削り痕が一部にみられるが、全体によく研磨されている。特に内面はていねいに研磨されており、すべすべしている。石鍋は9世紀後半ごろから室町時代にかけて使用されたものとされているが、<sup>註7</sup>本遺跡では伴出遺物が不明なため、使用年代はよくわからない。ただ、SK01内から14～15世紀代の青磁が出土しているので、それらとの関連も考慮されよう。石鍋製作地は長崎県大瀬戸町周辺の製作跡が著名であるが、本遺跡出土品についてはそれらとの比較を実施することができなかった。なお、県内では六日市町の九郎原遺跡と、<sup>註8</sup>松江市の犬敷遺跡に次いで3例目の資料である。



第17図 青磁・石硯実測図 1:3

### (4) 陶磁器 (第17図1・2)

SK01内から青磁碗が2点出土している。1点(第17図1、図版12の17-1)は口径15.6cm、高さ6.2cmの高台付の磁で、内外面ともに厚さ0.2~0.5mmのやや明るい緑色を呈する釉がかかっている。つくりはやや粗雑で、器壁に凹凸がある。内外面とも無文である。他の1点(第17図2、図版12の17-2)は底部を失っているが、口径15.5cmあまりの碗である。内外面ともに0.8~1mmの厚い濃緑色のきれいな釉がかかっており、つくりもていねいである。外面には花文、内面の上縁は雷文、その下には花文がある。いずれも中国製青磁と考えられ、14~15世紀ごろのものと思われる。

このほかに、SB01-P<sub>10</sub>内から16世紀代と思われる白磁青花小皿(図版12のa)が出土している。また、調査区南半部から羯輪壺片(図版12のc)、備前燒壺片(図版12のb)も出土している。

#### (5) 石 硯 (第17図3、図版12の17-3)

SK01内から出土したもので、2片あるが同一個体と思われる。頁岩製である。<sup>註10</sup>小片のため不明ではあるが、推定幅10cm以下の長方硯である。内面の形態は楕円形を呈し、側面は部分的にしか残存していないが垂直に立ち上がるものと思われる。裏面については欠失しているため不明である。水野和雄氏の分類に従えば長方硯ⅢBの範疇に入るものと思われる。<sup>註11</sup>SK01内からはこの石硯とともに青磁碗、瓦片、須恵器片が出土しているため明確な年代等については不明である。ただし、8世紀~9世紀前半には石硯が知られていないので、この石硯はSK01内出土の中国製青磁に近いところに使用されていた可能性が考慮されよう。

註1 本書掲載の瓦は、梅原肆郎、周藤国実、長沢やす子、松浦武夫、松浦晃、松浦末喜氏の採集あるいは保管の資料である。採集資料の実測図の大半は穴道年弘氏が作製したものである。なお、このたび実見することができなかった第13図8、第15図1は、『島根県文化財調査報告』第5集より引用した。

2 近藤正「寺院」『島根県文化財調査報告』第5集 昭和43年

3 註2に同じ。

4 註2文献116頁

5 近藤正「『出雲国風土記』所載の新造院とその造立者」『日本歴史考古学論叢』2 昭和42年 第3図10

6 内田律雄氏の御教示による。

7 下川達彌「滑石製石鑄出土地名表(九州・沖縄)」『九州文化史研究所紀要』第29号 昭和59年

8 卜部古博「九郎原Ⅱ遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

昭和 55 年

- 9 広江耕史「夫敷遺跡」『国道 9 号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ

昭和 58 年

- 10 三島欣二氏の御教示による。  
11 水野和雄「日本石硯考—出土品を中心として—」『考古学雑誌』第 70 巻第 4 号 昭和 60 年

## 6. ま と め

以上、調査の概要を述べてきたが、ここでは須恵器と軒瓦の年代等を中心に、そこから派生する若干の所見を述べて結びにかえることにしたい。

須恵器は量的に少ないが、時間的にはかなりの幅があるものと思われる。現在のところ最も古いと考えられる須恵器は内面にかえりをもつ蓋（第 16 図 1）で、柳浦編年<sup>註1</sup> 1 式にあたるものと考えられ、7 世紀中葉～後葉のものとされているものである。次の段階に位置づけられるものは輪状つまみを有する蓋（第 16 図 25）と、高台付坏（第 16 図 24）であろう。これらは柳浦編年 3 式に該当するものと思われ、8 世紀中葉を中心とした時期に位置づけられているものである。坏Ⅱb としたものはこれまであまり出土していないものであるため、柳浦編年には加えられていないのである。ただし、いずれも糸切によって切離したままのものであることから、切離手法からみれば柳浦編年 4 式以降のものとすることができよう。ところで、この坏Ⅱb に類似したものが松江市のオノ峠遺跡<sup>註2</sup> で 2 点出土している。オノ峠遺跡では、丘陵斜面で 7 つの加工段が検出され、その段上に掘立柱建物跡 16、土壇 2、住居跡状遺構 6 が検出されており、そこから多数の須恵器が出土している。これらの須恵器は山本編年<sup>註3</sup>Ⅳ期から柳浦編年 4 式までを含んでいるが、柳浦編年 5 式は全くみられないようである。このことは、坏Ⅱb とした類の須恵器もこれらの幅に納まる可能性が高いものと考えられる。したがって、坏Ⅱb は柳浦編年 4 式の中に含めて考えてもよいのではないかと思われる。

坏Ⅱa としたものは小片であるため不明確ではあるが、口縁部のくびれが明瞭であることなどから柳浦編年 4 式の古いグループにあたるものと思われる。

坏Ⅰとしたもの（第 16 図 3）もやはり柳浦編年 4 式に含まれるものと考えられ、この 4 式は 8 世紀後葉～9 世紀後葉に位置づけられている。

このようにみえると、柳浦氏の編年に従えば須恵器は少量ではあるが 7 世紀中葉～後葉のものから 8 世紀後葉～9 世紀後葉のものまで含まれていることになる。

次に瓦について、今年度調査で出土した軒丸Ⅰ・Ⅱ類、軒平Ⅰ・Ⅱ類を中心に若干触れることに

しよう。

まず、Ⅰ類軒丸瓦としたものであるが、現在のところ系統的に直接たどれるものは知られていないが、全体の文様構成や、外縁に面違い鋸歯文がめぐらされていることなどから8世紀でも前半の方に位置づけてもよいのではないかと思われる。

Ⅱ類軒丸瓦としたものは、量的に多く、かつては平安時代の「四天王像安置の寺」造営期のものと考えられてきたものである。<sup>24</sup>ところが、近藤正氏はこの瓦を奈良時代前半のものと考えられていたようである。<sup>25</sup>この種の瓦も類例のあまり知られていないもので、系譜は不明であり、文様などからすれば一見平安時代に降

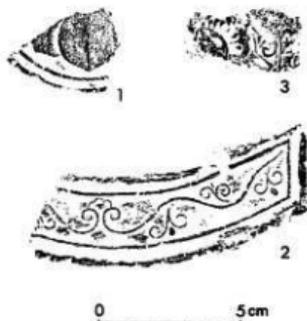
るものかのようにもみうけられる。ところが、恩田清氏によって注意された松江市西長江町字扇谷の常楽寺瓦窯跡では、このⅡ類軒丸瓦と四王寺Ⅰ類軒平瓦と出雲国分寺軒丸瓦（国分寺創建期とされているもの）<sup>26</sup>が採集されているのである（第18図）。考古学的な調査によって出土したのではないので不確定な点はあろうが、それらの瓦がほぼ近い時期に生産されていた可能性が高い。仮にそのように考えれば、出雲国分寺軒丸瓦の存在することから、四王寺Ⅱ類軒丸瓦とⅡ類軒平瓦は8世紀中葉から後葉にかけてつくられた蓋然性が高いものと考えられるとともに、その軒丸瓦と軒平瓦が組み合うと考えてさしつかえないものと判断される。

ここで今一度四王寺Ⅰ類軒丸瓦をみると、接合方法などはⅡ類軒丸瓦とほぼ同様ではあるが、全体の文様構成や、外縁に面違い鋸歯文がめぐらされるなど、明らかにⅡ類軒丸瓦より古い要素をとどめていると思われる。したがってⅡ類軒丸瓦の年代観からみてもⅠ類軒丸瓦は先に述べたように8世紀前半としてよいものと考えられる。

なお、この四王寺Ⅱ類軒丸瓦と同范と考えられるものに、出雲市大寺<sup>27</sup>（第19図2）、松江市中竹矢遺跡<sup>28</sup>（第19図1）出土の瓦がある。また、この種の系譜をひくと思われる瓦が八東郡玉湯町松之前廃寺<sup>29</sup>（第19図7）と松江市東生馬町平の前遺跡<sup>30</sup>（第19図6）から出土している。

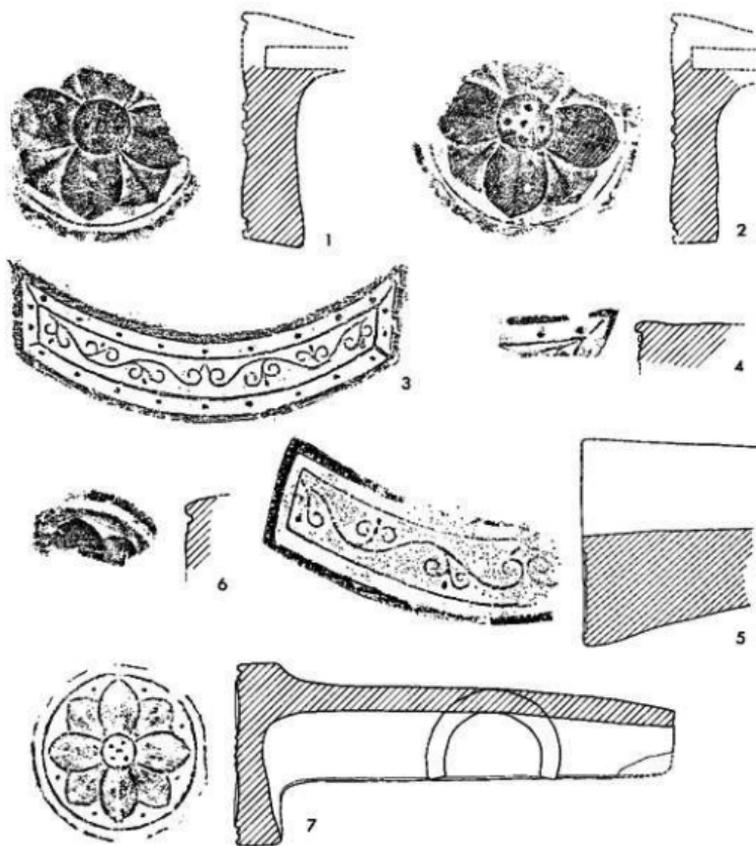
Ⅳ類軒丸瓦としたものは、出雲国分寺創建瓦を祖形にしたものといわれるもので、周縁の珠文帯もなく、主文様も著しく硬化したものと見える。したがって、少なくとも9世紀以降のものと思われる。

次に軒平瓦についてみることにしよう。Ⅱ類軒平瓦は、先にⅡ類軒丸瓦と組み合うものとして8世紀中葉～後葉に位置づけたが、Ⅰ類軒平瓦はどうであろうか。このⅠ類軒平瓦に最も類似したも



第18図 常楽寺瓦窯跡採集瓦拓影

（恩田清氏原図）



0 10cm

第19図 四王寺跡関連瓦実測図 1:4

- 1.中竹久遠跡出土軒丸瓦 2.大寺出土軒丸瓦 3.教興寺跡(野方庵寺)出土軒平瓦 4.米美庵寺出土軒平瓦(恩田清氏提供) 5.出雲国跡出土軒平瓦  
 (『島根県文化財調査報告』第5集より) 6.平の前遺跡出土軒丸瓦  
 7.松之前庵寺出土軒丸瓦

のは教興寺Ⅰ類軒平瓦（第19図3）とされるもので、近藤正氏、内田才氏は四王寺Ⅱ類軒平瓦より先行するものとされている。<sup>12</sup>また、四王寺Ⅰ類軒平瓦は段頸を有し、Ⅱ類軒平瓦は曲線頸であることから、畿内における頸の変遷とも合致するといえる。ただし、当地方でも畿内と同様な断面形の変遷を示すのかどうか確認されていない上、主文様においてはⅠ・Ⅱ類ともにほとんどかわるところがないので、両者はきわめて近い時期に位置づけられるのではないかと推測される。このⅠ類軒平瓦に類似した教興寺Ⅰ類軒平瓦について真田広幸氏は、上下外区と脇区に珠文がめぐるといふ新しい要素があり、これは7世紀末～8世紀初頭より若干下の時期ではないかとされている。<sup>13</sup>したがって、四王寺Ⅰ類軒平瓦はⅡ類とはほぼ同時期か、仮に古く考えても若干遅る程度（『出雲国風土記』成立後）であろう。

このようにみえてくると、現在のところ四王寺跡では『出雲国風土記』成立前にはⅠ類軒丸瓦のみがあり、この段階ではそれと組み合う軒平瓦は存在しないことになる。そして8世紀中葉以降になってⅡ類軒丸瓦とⅠ・Ⅱ類軒平瓦がセットをなして使われていたものと推測される。

以上、出土遺物からみると少なくとも須恵器は7世紀後葉まで遡り得る資料があり、瓦も軒丸瓦についてみれば8世紀前半とみなし得るものが存在するということである。このことは『出雲国風土記』成立時に四王寺Ⅰ類軒丸瓦を葺いた建物が存在していたことになり、これまで推定されてきたようにこの四王寺跡が『出雲国風土記』記載の新造院にあたる蓋然性がきわめて強くなったものといえる。

ところで、貞観9年（867）の下知によって設置されたといわれる「四天王像安置の寺」についてはどうであろうか。須恵器をみる限り、現状では積極的に9世紀後葉以降に位置づけられるものがないといえる。瓦についてみるとⅣ類軒丸瓦が9世紀代のものと考えられるが、量的に少なく、顕著ではない。したがって、現状では明確に「四天王像安置の寺」にあてるべく資料に乏しいといわざるを得ない。今後の調査に期待すべきところであろう。

さて、この遺跡で最も多く採集・出土しているⅡ類軒丸瓦とⅡ類軒平瓦はどのような事情によるものであろうか。これまでみてきたように出土遺物の年代観や『出雲国風土記』記載の方位、里程からすると、この遺跡は出雲臣弟山建立の新造院とみて良いものと考えられる。とすると『風土記』成立時に飯石郡少領であった出雲臣弟山が、天平5年（733）以前（出雲臣弟山の年令からすれば少なくとも7世紀後葉までは遡らないと思われる）に意宇郡山代郷に、Ⅰ類軒丸瓦を葺いた「殿堂」を建立していたと思われる。その後、出雲臣弟山は天平18年（746）に出雲国造に任ぜられることになる。<sup>14</sup>推測が許されるならば、出雲臣弟山が国造新任後にかつて自らの本貫地に建立した新造院を拡大整備したものと推測され、その際にこれまで多量に出土している四王寺Ⅱ類軒丸瓦、Ⅱ類軒平瓦が使用されたのではないと思われる。またその時期には、国造としては天平13年（741）の国分寺造営詔による国分寺建立にも協力しなければならず、常楽寺瓦葺跡にみられるように国分寺瓦

と四王寺Ⅱ類軒丸・軒平瓦が同一場所で製作されていたのではないかと考えられよう。

以上、出土遺物を中心にみてきたわけであるが、今年度調査では遺構としては寺院の主要建物跡とか、礎石の抜き取り痕跡とかを直接確認するまでには至っていない。ただし、要点を列挙すれば下記のような成果があったものといえる。

- ①出土遺物の年代観から、少なくとも『出雲国風土記』成立前に瓦葺きの建物があったものと推定され、それは『風土記』記載の出雲臣弟山建立の新造院にあたる蓋然性が強い。
- ②今年度調査区周辺は古代の遺構がかなり良好な状態で遺存している。
- ③かなり大規模な建物跡（SB01）や地山加工段があることから、今年度調査区は寺院の一角にあたる可能性もある。
- ④今年度調査では、貞観9年（867）の下知によって設置されたとされる「四天王像安閑の寺」の存在を裏づける明確な資料を得ることができなかった。
- ⑤中国製青磁や石硯が出土したことから、この付近に中世有力者の建物跡も存在する可能性が出てきた。

このように、今年度調査は小範囲の調査ではあったが、遺構・遺物がかなり良好な状態で遺存していることが明らかになったので、今後これらの成果をふまえて計画的に広範囲にわたって寺域・伽藍配置確認等の調査を実施すべきものと思われる。

注1 柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』昭和56年

2 内田律雄ほか「オノ峠遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ 昭和58年

3 山本清「山陰の須恵器」『島根大学10周年記念論文集』人文科学編 昭和35年

4 梅原末治「出雲国分寺と四王寺の址」『歴史地理』第31巻第5号 大正7年  
恩田清「山代南新造院と四王寺について」昭和39年7月13・14・15日付『島根新聞』

5 近藤正「『出雲国風土記』所載の新造院とその造立者」『日本歴史考古学論叢』2 昭和42年

6 常楽寺瓦窯跡資料については恩田清氏より御教示いただき、快く資料を提供していただいた。深甚なる謝意を表する次第である。

7 出雲考古学研究会編『古代の出雲を考える』3 昭和58年  
川上稔氏の御厚意により遺物を実測させていただき、内田律雄氏とともに四王寺跡出土瓦と同范であることを確認した。

8 広江耕史ほか「中竹矢遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告

書』Ⅳ 昭和58年

- 9 勝部衛氏の御厚意により実見させていただき、実測することができた。
- 10 岡崎雄二郎氏の御厚意により実見させていただき、実測することができた。
- 11 註5に同じ。
- 12 註5に同じ。

内田才「仏教」『安来市誌』昭和45年

- 13 真田広幸「奈良時代の伯耆国に見られる軒瓦の様相」『考古学雑誌』第66巻第2号  
昭和55年

- 14 『続日本紀』 天平18年3月条





1. 遺跡周辺の航空写真（昭和49年撮影）



1. 四王寺跡遠景（南東から）



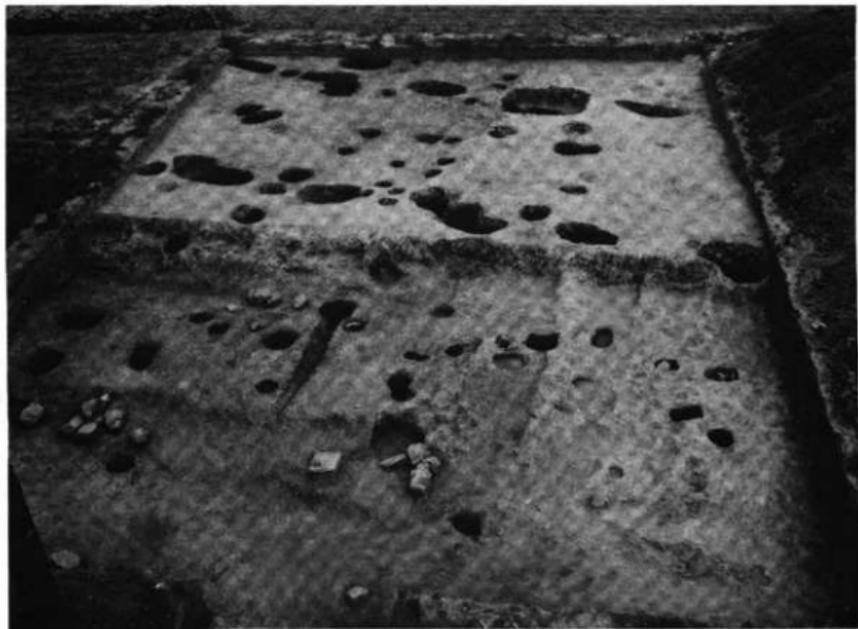
2. 四王寺跡近景（南西から）



1. 四王寺跡昭和59年度調査区全景（北から）



2. 四王寺跡昭和59年度調査区（東から）



1. 四王寺跡昭和59年度調査区（南から）



2. 四王寺跡SB01 検出状況（西から）



1. 段状遺構遺物出土状況（東から）



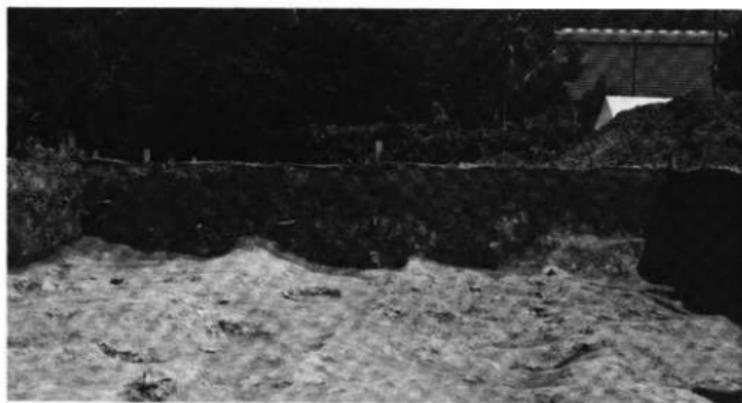
2. 段状遺構遺物出土状況（西から）



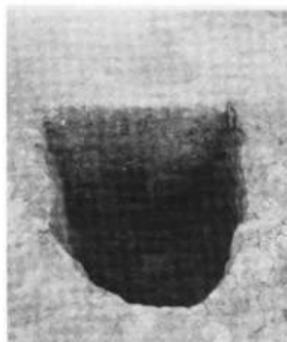
1. Y=+84km304ラインの土層（東から）



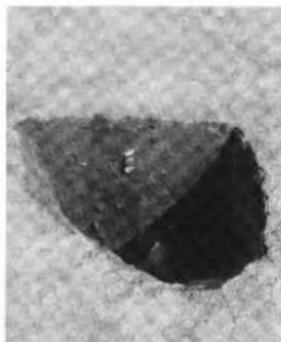
2. Y=+84km304ラインの土層（北東から）



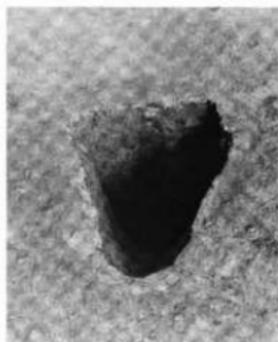
3. X=-62km896. 2mラインの土層（南から）



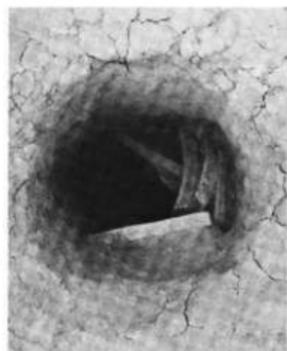
1. SB01-P<sub>2</sub>の土層



2. SB01-P<sub>3</sub>の土層



3. SB01-P<sub>5</sub>の土層



4. C-P<sub>5</sub>瓦出土状況



5. C-P<sub>9</sub>瓦出土状況

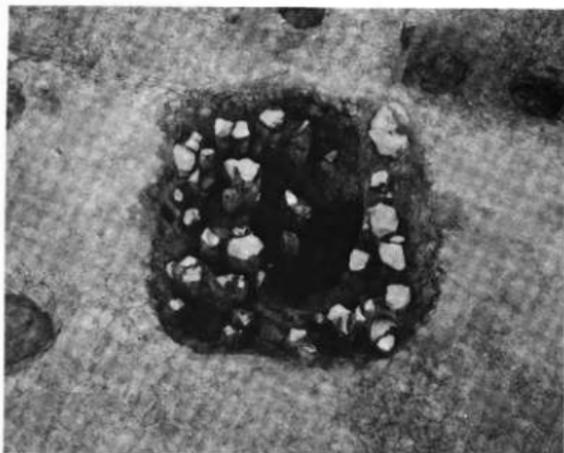


6. D-P<sub>5</sub>瓦出土状況

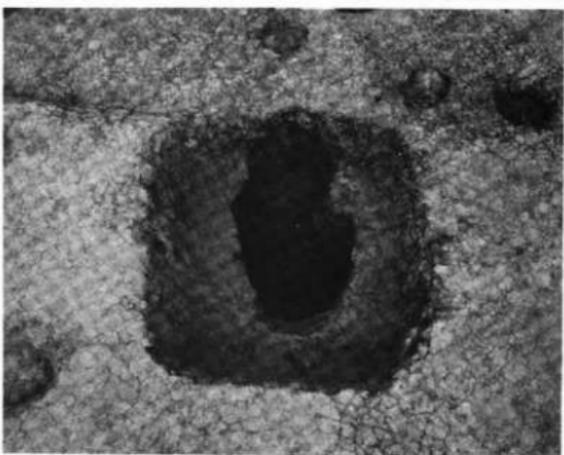


7. 四王寺跡発掘調査風景

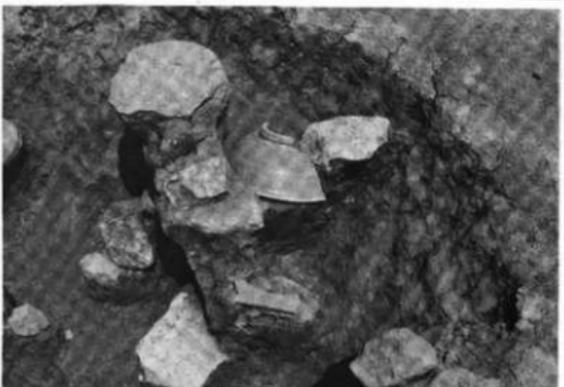
1. 四王寺跡 SK01  
遺物出土状況

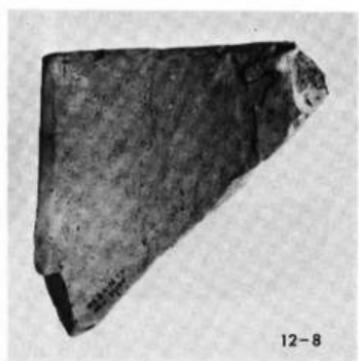


2. 四王寺跡 SK01  
SB01-P<sub>4</sub>検出状況

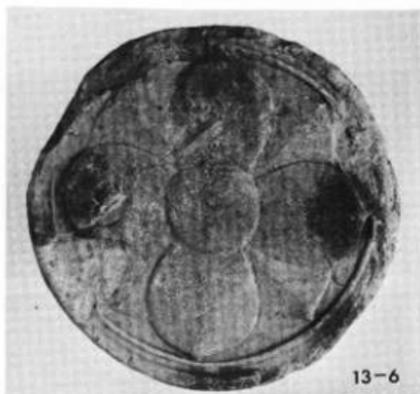


3. 四王寺跡 SK01 内  
遺物出土状況部分

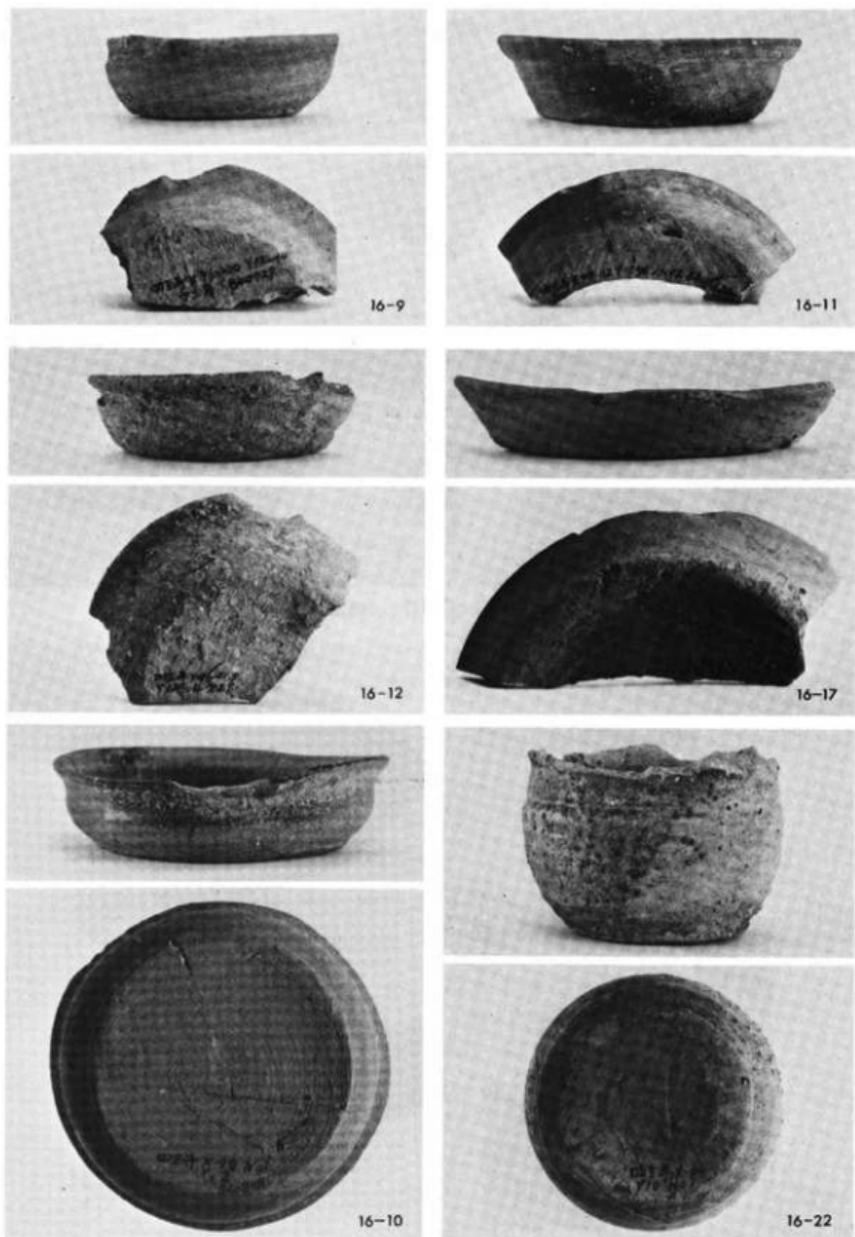




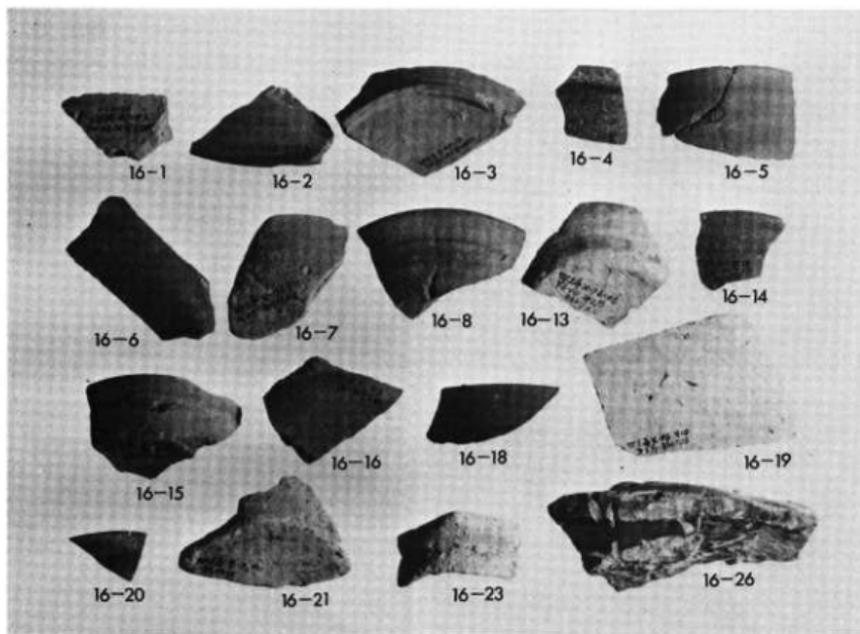
1. 四王寺跡昭和59年度調査出土瓦



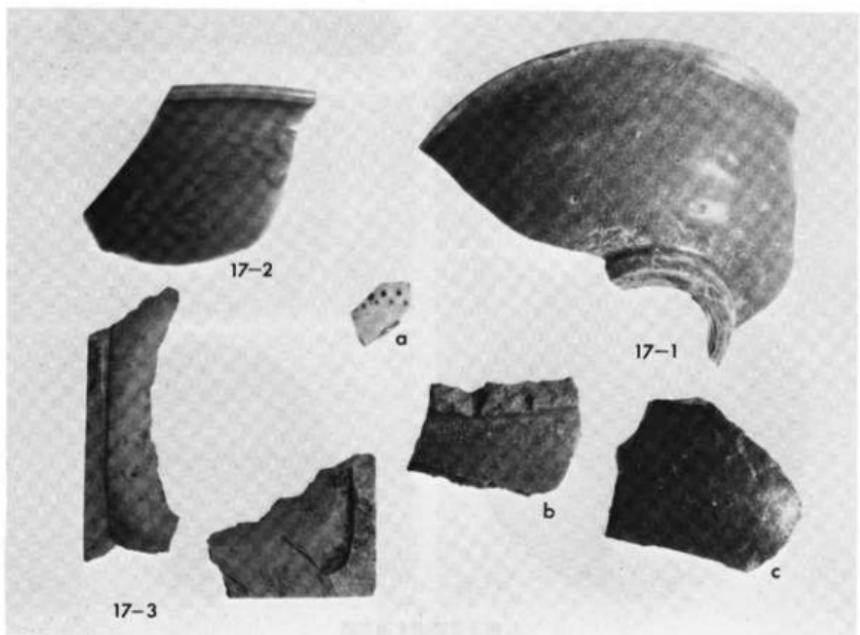
1. 四王寺跡採集瓦



1. 四王寺跡出土須恵器



1. 四王寺跡出土須惠器・土師器・石鍋



2. 四王寺跡出土陶磁器・石硯

昭和60年3月25日印刷

昭和60年3月30日発行

## 風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅳ

— 島根県松江市山代町所在、四王寺跡 —

発 行 島 根 県 教 育 委 員 会

松江市殿町1番地

印 刷 株 式 会 社 報 光 社

平田市平田町993